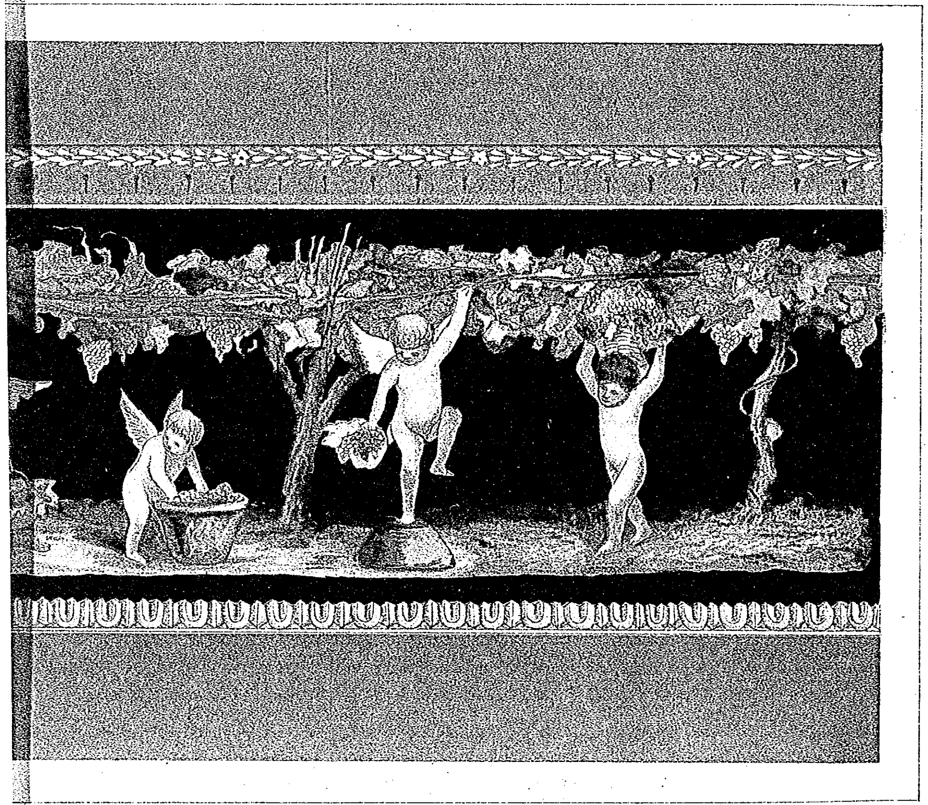
K220.25
5
1

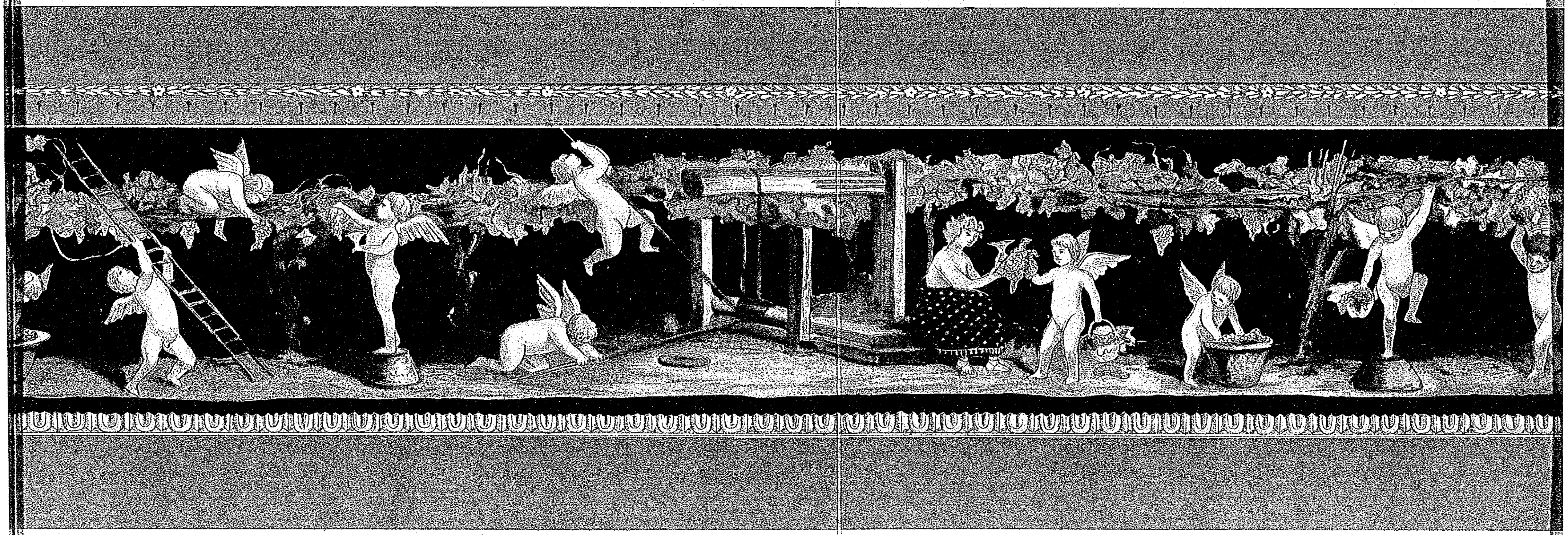
文學博士坪井九馬三著

中學西洋歷史教科書

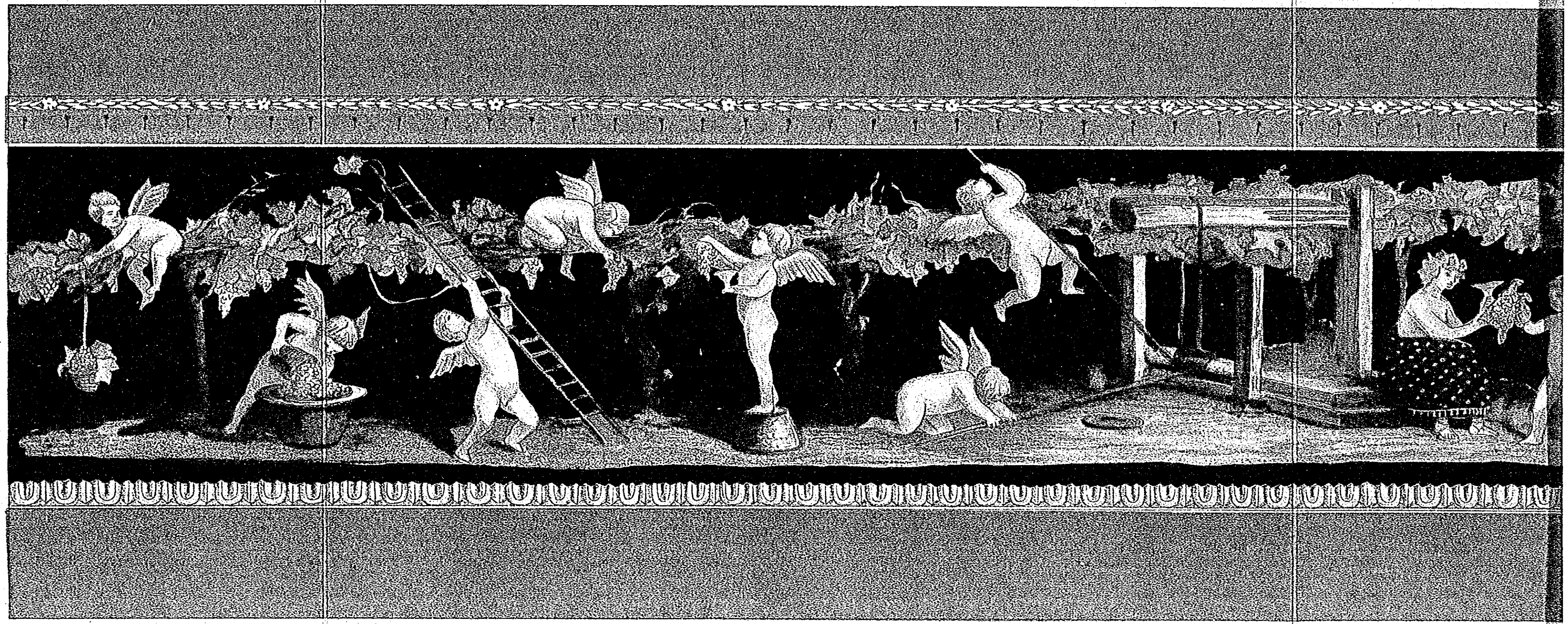
卷上

東京 文學社





ローマ古畫（一世紀）



ローマ古畫（一世紀）

例言

一、本書は文部省にて定めたる中學校西洋歷史の敎授要目に基きて撰述せり。但表題の順序、字句の叙述、敎授に便ならざるものは必しも之に拘泥せず。

一、人名・地名の稱へ方及書き方は總て外國地名及人名の稱へ方及書き方取調委員の復命書に據る。其復命書に記載なきものは、該委員の調査方針に依りて之を定む。

一、年代の書き方は總て表の式に據る、唯、數字を擧げたるはキリスト紀元後と知るべし。

一、行文は、必要の事項を網羅し且要領を得易からしむることに努め、記述の冗長を避けて大に敎授者活動の餘地を設けたり。

一、古來の傳說中荒唐不稽のものは悉く之を排除せり。但從來多

くの敎科書に記載せざりし事項にても歷史上確定したるものは之を採錄せり。

一、各國の歷史を叙ずるに大國は繁に過ぎ小國は簡に失する如きことなく努めて公平を旨とせり。又戰爭の如きは、其原因結果のみを明にして戰史に陷るを避け、文學・技藝・宗敎・實業の發達を叙することに力を注ぎたり。

一、挿畫及地圖は、確實なる原圖によりて模寫せしめたれば、記事と相須て說明の効あるべしと信ず。

明治三十六年二月

著者識

中學西洋歷史教科書　卷上

坪井九馬三著

第一篇

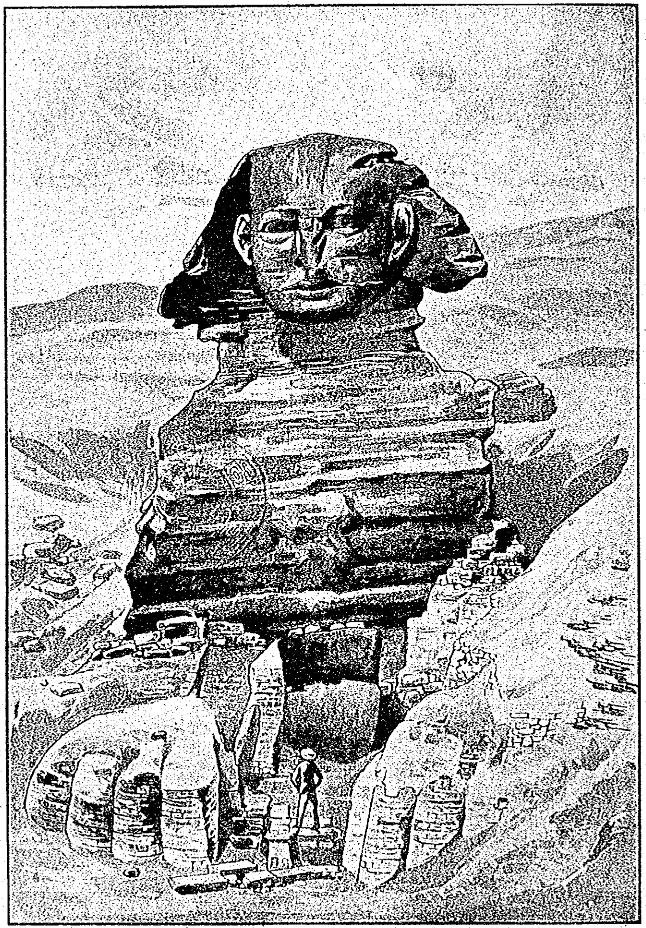
第一章　エジプト　ヘブライ

最古文化國

第一節　アフリカにナイル河あり、毎年夏至・秋分の間に溢れ、兩岸の沙漠を變じて沃土となす。文化夙く此地に發展し、一大國家起る、エジプトといふ實に世界最古文化國の一、其起原審にすべからず。

エジプトの政體

第二節　政體は、專制にして王あり。日神の子と稱し、神と崇められ、政敎を統べて、無限の權力を有す。神官・戰士の兩階級



スフィンクス（下部を發掘せるもの）

あり、神官は、諸神に仕へ政務を執り、學術を修め、戰士は、國家禦侮の任に當る。學術技藝夙に起り、星學・數學・醫術・冶金術・建築術・彫刻術等觀るに足るものあり。設計の雄偉なるを以て名あり。假名字は、一種の形象音字にして、眞・行・草の別あり。或は石に刻み或はカヤツリ紙に書き、往々今に存せり、されど、國民に進取の氣風なく、其文化一定の度に達して止む。

フフ・ハフラ

第三節　エジプトの史は、フフ・ハフラ父子、メンフィスに王たるに始まる。後紀元前二十世紀に至り、シリアの一遊牧民族來侵して、國土を占領する五百餘年、テーベ王起ちて之と爭ふ三代、終に之を恢復せり。

テーベ王

セチ・ラメス

第四節　紀元前十四世紀、セチ・ラメス父子の時に至り、南エチオピアを服し、東北シリアのヒタと和し、東メソポタミアを蠶

食す。ラメスは、國內の諸地に大殿堂を建てて其功業を紀せり。是よりエジプト漸く衰へ、或はエチオピアに歸し、或はアッシリアに降れり。プサマチク・ネク父子の時、獨立を恢復し、商業・航海を奬め、舊俗を壞りて、ギリシア人の雜居を許ししも、國勢遂に振はず、後五二五年ペルシアに亡ぼさる。

（プサマチク・ネク）

（ヘブライ）

第五節　ヘブライは、アブラハムを國祖とす。原とカルデアに居り、後其民を率ゐて、ヒタの南境カナーンに移る。其裔ヨセフ、エジプトに仕へ、遂に豪族となり、ニールの下流ゴセンの地に居り、セチ・ラメスの時苛役に苦む。モーセ意を決して叛き、シナイ半島に遁れ、法を定めて政教を整へ、カナーンを取る策を建てたり。

（ヘブライの政教）

第六節　ヘブライは、一神教を崇め、神を主權者とし、神官神慮

サムエル　ダビデ　ソロモン　イスラエル　ユダヤ

を奉じて事を行ふ。モーセの死後、シォフェチムを置き、軍國の事を掌らしむ。シォフェチムは判事の意なり。

第七節　紀元前十一世紀、サムエル判事たり、國勢復振ふ。民の望に從ひ、王を置き、サウル之に任ず、後相合はず、又、ダビデを王とす。ダビデ・サウル、互に位を爭ひ、一〇三三年、ダビデ遂に王となる。是に於て、隣國を征し、其疆域、紅海・エウフラタ河に及び、イェルサレムに治す、實に此國最盛の時とす。

第八節　ダビデ死し、ソロモン立つ、聰明なり。フェニキアの技師を用ひて、殿堂・宮殿を起し、フェニキアの船舶を使ひて、インド・イスパニアの金銀塊を收め、モーセの法を破りて軍馬を牧ひ、驕奢を盡し、專制に陷る。其死するに及びて、國分れて二となり、北部十州は、イスラエルと稱し、南部二州は、ユダヤと稱せり。

カルデア　アッシリア

國力漸く衰へ、七二一年アッシリア、サマリアを陷れ、イスラエル亡ぶ。五八八年バビロニア、イェルサレムを屠り、ユダヤ滅ぶ。

第二章　アッシリア　バビロニア　フェニキア

第一節　アジアの西に、エウフラタ・チグリスの二大河あり、其下流平野を漑ぎて、ペルシア灣に入り、兩岸の地は肥沃に、河口は、水深くして大舶を通ずべし。其地をカルデアといふ。太古アッシリア・バビロニアの二國、迭に此に起る。

第二節　アッシリアは、チグリス河上流、左岸の山地、アッスルに起り、ニヌアに都す。南カルデアを平げて、其文物を納れ、王は、諸王の王と號して、政敎を統べ、神慮を宣りて事を行ふ宗敎は、天體崇拜にして、文字は、楔形の音字・意字より成る民情慓悍

にして武を尊び、技術は壯大を宗とす。農業・商業頗る盛なり。

最初の大統一國

第三節　紀元前十二世紀末、チグラト ピレサル一世、アルメニアを征し、八世紀に、チグラト ピレサル二世、シリアを取りて隷州となし、二十五王の朝貢を受け、サルゴン二世は、イスラエル・ヒタを亡ぼす。七世紀に、アサル ハドン、エジプトを從へ、國勢其極に達す。實に西洋史上最初の大統一國とす。

アッスルバニパル

第四節　アサル ハドン死し、子アッスル バニパル立つ、英武にして器略あり、文學・技藝を奬め、大土木を起し、大に文化を興す、六二六年死し、子アッスル イチル イリ立つ。明年バビロン總督ナボポラサル、メデアのキアクサレスと呼應して叛き、ニヌア陷り、王自殺して、アッシリア亡ぶ。

アッシリアの滅亡

バビロニア

第五節　バビロニアは、古カルデアの地に起り、バビロンに都す。アッシリア亡びて、メヂア・バビロニア・リヂア・エジプトの四國對峙す、六〇五年エジプト王ネク二世、バビロニアを伐ちて、カルヘミシに敗績し、シリア・パレスチナ・フェニキア、復バビロニアに歸す。バビロンは、インド貿易の大都會にして殷富なり。ペルシア王キロス、之に垂涎し、大兵を將て之を圍む、五三八年王ナブ ナヒッド降り、バビロニア亡ぶ。

フェニキア

第六節　フェニキアは、地中海の東隅、リバノン山西の沿岸狹小の地なり、夙に商業・航海を以て鳴り、黄金細工に巧に、紫色染料を專賣し、世界の貨物を集散す。又其用ひたる音字は、インドに入りて梵字となり、ギリシア・イタリアに傳はりて、ギリシア字・ローマ字となれり。

第七節　フェニキア人は、船舶を家とし、港灣を國とす。是を以

シドン
チル
カルタゴ
メヂア

て幅十里の沿海地に、數多の國をなす。シドン・チルの二國、殊に豪富を以て著はる。シドン先づ興る、ヘブライの侵入に當り、避けてエーゲ海の諸島、ギリシア半島に移民す。チル次で起り、イスパニア・アフリカ北沿岸に移民し、イスパニアの銀、イギリスの錫、北海の琥珀を輸入して、巨利を占む。カルタゴは、實にチルが八五〇年に置く所、本國愈衰へて愈盛なり。

第三章　ペルシア

第一節　カルデアの北、カスピ海の南は、イラン高原なり。メヂア・ペルシア二國相次で興る。メヂアは、其北部に位し、夙くアッシリアに屬す。紀元前七世紀に獨立し、エクバタナに都す。キアクサレス立ちて、アッシリアを滅ぼし、東バクトリア・南ペルシアを併

ペルシア
キロス

せ、六一〇年リヂアと和して、ハリス河を境とす。五九六年死し、子アスチアゲス立つ、子なし。外孫キロス取て之に代り、ペルシア國を建つ、實に五五八年なり。

第二節　ペルシアは、メヂアの南、ペルシア灣に沿へる山地なり。國民慓悍にして騎射を善くす、ザラツストラの教を奉ず、其經典をアベスタといふ所謂祆教の聖書にして、ゼンド古言を以て撰めり。イラン人太古の情況を窺ふべし。

第三節　キロス位に在る三十年、四方を攻伐して、大業を創む。會リヂア王クロイソス、スパルタ・バビロニア・エジプトと同盟して、ペルシアを伐つ。同盟軍未だ到らず、キロス既に國都を圍む。五四〇年國都サルデス陷り、王虜にせられ、小アジア平ぐ。キロス次でバビロニアを攻めて之を幷す。シリア・パレスチナ・フェニキ

ア皆屬す。五二九年死し、子カンビセス立つ。

カンビセス

第四節　カンビセス暴虐にして子なし。五二五年エジプトを征して之を取る。外征する三年、國大に亂る、乃師を旋して、シリアに至り、傷きて死す。是より先き、弟スメルヂスを殺す、メヂア人コメテス、スメルヂスと稱し、陰にメヂアを復興せんとす。

ダリオス

第五節　是に於て、ダリオス衆に推されて立ち、叛亂を戡定しベヒスタンの山崖を磨きて、其功業を勒す。王聰敏にして英主の資あり。位に在る三十七年、疆域を二十行政區に分ち、區に長官を置き、民政の全權を委ぬ。又要處に將軍を配置し、鎭護の任に當らしむ。尊號を諸王の王又は大王といひ、王統をアケメネス朝といふ。

アケメネス朝の版圖

第六節　この朝の時、版圖廣大にして、東インドス河に至り、

西リビアの沙漠に接し、南インド洋に臨み、北ヤクサルト河に及ぶ。アッシリア盛時の疆域に比して更に大なり、キロスの業、茲に大成す。

ギリシア人の植民地

第七節　小アジアの西部、地中海の沿海地方に、ギリシア人の植民地多し、リヂア亡びて後、ペルシアに屬す。爾來其關係漸く密に、遂に植民地の亂より延きて、ギリシア本國との關係を生じ、大衝突を生ずるに至る。

第四章　ギリシア

ギリシアの地勢

第一節　ギリシアは、原名ヘルラスといひ、地中海の東邊に在り、其南方の小半島をペロポネソスといふ。海岸は屈曲に富み、附近の海上に羅列する島嶼は、地肥えて、小アジアに達する

自然の梯をなすも、內地は山岳連亘して、曠野少く、大河の海岸と聯絡を通ずべきものなし。即商業・運送業を以て邦を建つる小國民の叢生すべき地なり。ギリシア人は、實に斯の如き國民なり、此に割據せるは自然の勢なり。

ドリア人

第二節　紀元前十二世紀の初、ドリア人北部ギリシアより南下して、ペロポネソスに入り、アカイア人を逐ひて、其地に住す、爾來イオニア人も、亦小アジア地方に植民せりといふ。諸國中最古く、且最有名なるスパルタは、ドリア人、アテネは、イオニア人、テーベはエオリア人の建つる所なり。

イオニア人

スパルタ

第三節　スパルタは、ペロポネソスの南部に在り。世襲の王を戴き、元老・公民の兩議會あり。國風剛毅を重んじ、社會の事、悉く國家の見地より論定し、大に武斷に流る。八世紀より隣國

を伐ち、ペロポネソスに雄視す。

アテネ

第四節　アテネは、ペロポネソスの北部地方と接する地に在り。初め王を戴きしも、後廢して、アルコンを置く、執政官なり、又貴族政治となる。六世紀にソロンあり、法を革め、財產の多寡に依りて其勢力を分つ。チランノスピシストラトス銳意治を圖り、商工業大に起り、學術・技藝亦漸く萌す。チランノスは、專制主を謂ふ。クリステネス出づるに及びて、大に民權の伸張を圖り、共和制となり、文學・美術益進む。國風優美を崇び、學術・技藝に力め、スパルタと全く相反す。

ギリシア人の植民地

第五節　ギリシア人は、太古より植民の風あり。エーゲ海の諸島、及沿海地到る處に移民し、マケドニア・トラキア・タウリ半島に及ぶ。是を以て、其勢力範圍は、東キプロスより西フランスに至

アルテミス（ドリア人の崇敬する女神）

り、南キレネより、北タウリ半島に至る。而してフェニキア人、亦處々に植民し、自ら交渉するに至る。

ギリシア諸國及其植民地の協同

第六節　ギリシア諸國、及其植民地は、皆各割據獨立の姿を爲し、政治上の中心を缺くも、なほ協同するを得しは、其言語・血統の同一なると、其宗教・儀式の性質とに依れり。

ギリシアの宗教

第七節　宗教は、神話に基き、神は國民の指導者にして、人間と交渉する者とす。其主なる者十二ありて、最も尊きをゼウスといふ。天の主神なり。オリンポス山に治し、諸神皆其周圍に在り。ゼウスを祭らん爲に、オリンピア祭と稱し、滿四年毎に、全ギリシア人エリスのオリンピアに聚りて、競技を爲す。宗教・儀式の同盟たるアンフィクチオニアと、共に全ギリシア人を一致せしむる要具なり。

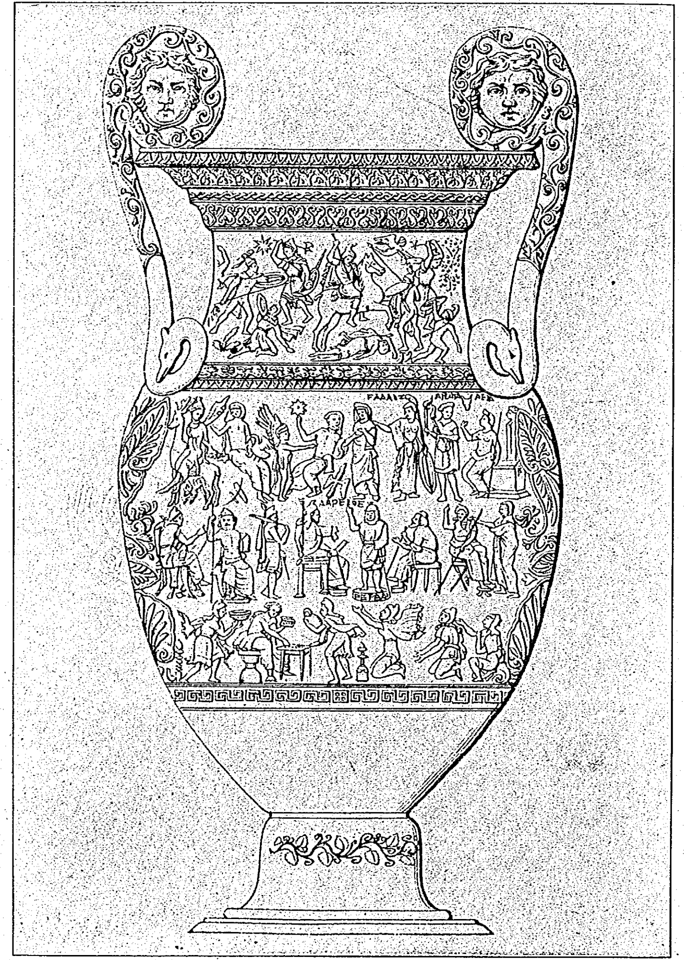
ギリシアの文化

第八節 ギリシアの文化は、西洋文化の淵源にして、ギリシア人の獨創に係る所少からず、殊に、文學・美術に於て、古今獨步と稱せらる。詩人に、ホメロス・エスキロス・ソフォクレス・エウリピデス・ピンダロス、史家に、ヘロドトス・ツキヂデス、哲學家に、ソクラテス・プラトン・アリストテレス・ピタゴラス、彫刻家に、フィヂアス・プラクシテレス・スコーパスあり。皆千古の大家と稱せられ、建築亦精妙を以て鳴る。醫學又夙く起り、ヒポクラテス・クテシアスあり。學祖と仰がる。

第五章　ペルシア・ギリシアの交渉

アリスタゴラス

第一節 紀元前五〇〇年アリスタゴラス、ミレトスに據り、ペルシアより離畔せんとす。小アジアのギリシア人殆皆之に與



ダリオス　ギリシア征討を議す（ギリシア古甕）

し、アテネ・エレトリア亦兵を發して之を援く、幾許もなく亂平ぎ、ペルシアの威壓舊に倍す。

ダリオスの報復

第二節　是に於て、ペルシア王ダリオス、アテネを悪み、竊に報復を圖る。四九三年マルドニオスをして海陸兩軍を率ゐ、ギリシアを伐たしむ。而して海軍は、アトス崎に於て、風波の爲に散じ、陸軍はトラキア人に破られ爲すなくして歸る。又使を遣して「土と水」とを納れんことを、ギリシア人に要む、アテネ・スパルタ等、怒りて使者を辱しむ、ダリオス報復の志益〻固し。

ペルシア第二の入寇

第三節　四九〇年ダリオス再び二宿將をして、大兵を率ゐ、エーゲ海を渡り、ギリシアを侵さしむ。軍ナクソス・キクラデスを取り、エレトリアを掠め、アチカに上陸す。アテネ急をスパルタに告げ、入援を請ふ、援兵未だ至らず、アテネの將ミルチアデス、ア

テネ兵一萬を率ゐて、ペルシアの大軍と、マラトンの野に戰ふ、ペルシア軍敗れて國に走る。

ペルシア第三の入寇

第四節 ダリオス愈、怒り、大に外征を議す、而も準備未だ成らず、四八六年死し、子クセルクセス立つ。クセルクセス父の遺志を紹ぎ、四七八年春、親ら陸軍百七十萬、戰艦千二百隻を率ゐて發す。陸軍はヘレスポントを渡り、トラキア・マケドニア・テッサリアを經、海軍は海岸に沿ひ、海陸并び進む、向ふ所披靡せざるなし。

アリスチデス・テミストクレス

是より先き、アテネにアリスチデス・テミストクレスの二政治家あり、前者は陸軍擴張を說きて逐はれ、後者は海軍增設を唱へて納れられ、諸國に說き、スパルタを盟主とし、勠力して國防に當る。

第五節 夏、ペルシア軍進みてテルモピレの險に至る、スパル

レオニダス

タ王レオニダス、スパルタ兵三百と援兵千餘を以て關を守る。數日にして破れ、全軍盡く之に死す、ペルシア軍アテネに入る。

ギリシア艦隊の大勝

第六節　ギリシア艦隊は、ペルシア海軍をアルテミシオンに破りしも、陸軍の敗を聞き、サラミス灣に退く。テミストクレス乃計を定め、ペルシア海軍をサラミス灣に誘ふ。秋、ギリシア艦隊三百七十隻、ペルシア海軍と灣内に戰ふ。クセルクセス敗績し、兵を棄てて國に歸り、別にマルドニオスを止め兵二十五萬を授けて、テッサリアに屯せしむ。

ペルシアの敗北

第七節　マルドニオス、説きてアテネを降ださんとす、應ぜず、明年復アテネに入る。ギリシア聯合軍の進むを聞き、ボイオチアに却き、スパルタ王パウサニアスに、プラテーエーに破られて死

し、ペルシア兵のヘレスポントに至りしもの僅に四千といふ。ペルシア海軍は、ミカレに據りて守る、アテネのクサンチポス襲ひて之を滅ぼす。後四六六年アテネのキモン、ペルシアの海陸兩軍を、エウリメドンに破りてより、ペルシア又ギリシアの邊を窺はず、其勢威漸く衰へ、ギリシア漸く興る。

第六章　ペロポネソス戰役　テーベの覇業

デロス同盟

第一節　ペルシア入寇の初、スパルタの威熖甚盛なりしも、戰役の終に至り、アテネ漸く強大にして、アリスチデスの策を納れ、ペロポネソス以外の諸島・諸港を并せて、デロス同盟を結び、アテネ盟主と成り、キモン海軍に將となり、以てエーゲ海を制す。是に於て、同盟諸國唯命に惟れ從ひ。アテネの聲望スパ

ルタを壓す。キモン逐はれて、ペリクレス出づ。

ペリクレス時代

第二節　ペリクレスは、クサンチポスの子なり、民主主義を懷き、經世の才あり。其アテネを治むる十九年、人才輩出し、文物燦然として、商業大に振ふ、之をペリクレス時代といふ。而して同盟諸國の陰にアテネを怨み、スパルタに從はんとせるもの漸く多し。

ペロポネソス同盟

第三節　スパルタは勢の赴く所を察し、テーベを扶けて、アテネに畔き、ボイオチアの盟主と成りて、アテネを抑へしめ、自らペロポネソス同盟を結びて、之に當る。是に於て、ギリシア二派に分裂し、スパルタは貴族政治を代表し、アテネは民主政治を主張して、各國家團體の首長となる。

コリント

第四節　ペロポネソスの咽喉に、コリントあり、嘗てコルキラ島

に植民す、コルキラ殷富にして海軍に長ず。其植民地に、エピダムノスあり。コルキラと隙を生じ、援をコリントに求む。コリント急に赴き、反りてコルキラに破られ、報復を圖る。コルキラ恐れて盟をアテネに乞ふ、アテネ之を許す。コリント之に苦み、スパルタを激し、アテネと交渉せしむ、成らず。四三一年、遂に戰起り、互に勝敗あり。四二一年アテネのニキアス、計りて五十年の平和條約をなす。

アルキビアデス

第五節　アテネ復富み、少壯の士外征を欲す、ペリクレスの族、アルキビアデス大志あり。シチリア島を降だして、之に據り、カルタゴ・イタリアを定め、以て地中海を制せんと圖り、大艦隊を率ゐて、シチリアに至る。幾許もなく、アルキビアデス罪を獲て、スパルタに走り、師又シラクサに潰え、一人も生還するものな

ペロポネソス戰役

し。スパルタ亦海軍を創め、以てアテネに當る。スパルタの海將リサンドル頻に勝ち、終に四〇五年エゴスポタミに、アテネの海軍を滅ぼし、明年アテネを降だす。アテネ遂に衰へ、スパルタ同盟の一國となる、役起りてより是に至る二十八年、之をペロポネソス戰役といふ。

スパルタの專横

第六節　アテネ降りて、スパルタ全ギリシアの覇權を握り、諸國に若干の執政官を置き、大に威福を縦にす。アテネに畔きしもの、皆悔いてスパルタを怨む、テーベ・アテネ・コリント・アルゴス殊にスパルタを惡む。

ペルシアの入寇

是より先き、ペルシア王クセルクセス死し、長子アルタクセルクセス立つ。弟キロス母に寵あり、陰に異圖を懷き、スパルタを援けて、ペロポネソス戰役に勝を制せしめ、ギリシア兵一萬三千を傭ひて、王位を爭ひ、クナクサに戰

死す、是に於て、ペルシア、スパルタを怒り、テーベ・アテネ等に軍資を供し、海軍をして、ラコニアを侵さしむ。三九五年リサンドル、ボイオチアを伐ちて戰死し、スパルタ軍退く。テーベ人イスメニアス、乃テーベ・アテネ・アルゴス・コリントに說きて同盟せしむ、エウボイア・アカルナニア・テッサリア等之に加はる。スパルタの覇權將に地に墜ちんとす、

アンタルキダス條約

スパルタ大にアテネの復興を怖れ、說客アンタルキダスをペルシアに遣はし、大王に說きて、小アジア沿海の植民地を、ペルシアに割き、スパルタの勢力範圍をペロポネソスに縮め、自餘のギリシア諸國に、其獨立權を還さんとす。三八七年ペルシア・ギリシア諸國の使節をサルデスに會し、アンタルキダスの議を納れ、勅旨として之を宣す。諸國ペルシアを恐れ、平和の成るを賀し、喜びて之に從ふ、之をアンタルキダ

ス條約といふ。

第七節　スパルタは、アンタルキダス條約を厲行して、諸國を孤立せしめ、自らペロポネソス諸國を率ゐて之に臨み、隱然覇權を振ふ。三八三年スパルタ、テーベに執政官を置く、ペロピダス等策を決して之を討ち、アテネ等と同盟して、スパルタを挫かんとす。

テーベ・アテネ等の同盟

アテネのチモテオス、二十四國を合從して、テーベに應ず。三七八年スパルタ王アゲシラオス、テーベに向ひ、アテネ兵の備を見て戰はずして還り、アテネの海軍、連年スパルタを苦む。而してスパルタ・アテネの二國、皆兵に倦み和を欲す。

平和會議

スパルタ乃三七一年を以て、平和會議をスパルタに開き、諸國の使節を招集す。テーベの使節エパミノンダス亦會す、スパルタの主張にて、諸國がアンタルキダス條約に基きて議するに方り、起

ちて大にスパルタの政策を詰る、スパルタ怒りてテーベと絕ち、王クレオンブロトスに大兵を授け、之を懲さしむ。

テーベの大勝

夏エパミノンダス、寡兵を將て、スパルタ軍とレウクトラに戰ひ、大に之を破る。スパルタ爲に威名を失ひ、ペロポネソス諸國、スパルタに叛く、テーベの覇業是に於て成る。

アルカヂア聯合

第八節　アルカヂアは、ラコニアの北にあり、スパルタに隷す。レウクトラの戰後、テゲア・マンチネアの二地、先づ獨立し、アルカヂア諸地を糾合して聯邦を起す、スパルタ之を伐つ、アルカヂア援をテーベに乞ふ、エパミノンダス・ペロピダス赴援す、スパルタ軍退く、テーベの二將乃ラコニアを侵し、村落を焚き、人民を屠る、王アゲシラオス纔に國都を禦ぐ。エパミノンダス轉じてメセニアに入り、遺民を招きて自立し、國都メセネを建てしむ。幾

許もなく、アテネ、スパルタの急を救はんとする報あり、乃師を旋す。是に於て、アルカヂア・メセニア・アルゴスと合し、スパルタ羽翼を失ふ。

エパミノンダス

第九節　エパミノンダス又海軍を創め、アテネの同盟國ビザンチオン等を降だす、アテネ大にテーベを忌む。三六二年ペロポネソス大に亂れ、エパミノンダス復アルカヂアに出づ。スパルタ王アゲシラオス、之をマンチネアに防ぐ。エパミノンダス直にスパルタを衝く、王馳せ歸りて之に備ふ、テーベ軍スパルタに入りしも取る能はず、退きてマンチネアに敵軍を擊ち、之に克つ。是日エパミノンダス傷きて死し、業を繼ぐものなし、テーベ・スパルタ共に衰へ、復全ギリシアを率ゐて禦侮の任に當る國なし。

第七章　黑海の沿海地方　マケドニアの勃興

スキタ

メガラ人

トラキア

第一節　黑海は、古へエウクシノス海といふ、實に當時極北の絕海たり。西岸をトラキア、北岸の半島をタウリの半島、東岸をコルキスといふ。沿海地に數多の夷種居住す、言語・風俗往異なり、ギリシア人之を總稱してスキタといふ。太古の代、メガラ人タウリ半島に植民し、山南の暖地に葡萄園を拓きて酒を造り、ジパシの潟に鹽田を開きて食鹽を製す。ヘラクレア・テオドシア・パンチカ・パイオン・ファナゴリアの諸國是に於て起る。トラキアは、地肥えて農業に適し、山は森茂りて良材を出だす、是に於て、沿岸に數多の植民地起り、ビザンチオン商港を以て最も鳴る。アテネがペロポネソス戰役に耐へしは、トラキ

コルキス

アの小麥・艦材を専有したればなり。コルキスはカウカソス山南の地、沙金を産し、メヂアに出づる要路に當る、是に於て、ファシスの要港あり、インド陸道起點の一なり。實に黒海の沿海地方はギリシア人の寶庫にして、アテネ・スパルタ・テーベ盛衰の基く所なり。

マケドニア

フィリポス

第二節　トラキアの西南に、マケドニアあり、南テッサリアに連なる、海岸に商港多く、内地は金銀鑛に富む、アンフィポリス・オリトンス殊に名あり。内地は山多く、ギリシア人の異種ここに居住す。テーベの盛時、ペロピダス嘗て王位の爭を解く、王世子フィリポスを質としてテーベに遣る、フィリポス、テーベに修養せられ、豪邁にして大志あり、ギリシア式方陣を完成し、全ギリシアの盟主となり、以てペルシアに報復する志を懷くに至

れり。

フォキス

第三節　三五五年フォキス、デルフォイの神領を掠む、アンフィクチオニア之に過大の罰金を課す。フォキス乃デルフォイの神寶を奪ひ、金銀貨を鑄て、傭兵を募る、スパルタ・アテネ等、テーベを惡み之に應ず。フォキス又テッサリアを侵す、テッサリア援をマケドニアに乞ふ。

マケドニアの勃興

第四節　マケドニアは此時國富み兵強し、テッサリアの乞を納れ、フォキスを伐つ。デモステネス、アテネ人を警め、テルモピレ關を守らしむるに遇ひ、退き、三四六年に至り之を平ぐ。マケドニアの勢威頓に揚り、フィリポス、アンフィクチオニアの一員となり、オリンピア祭に列し、ギリシア諸國に加はる。

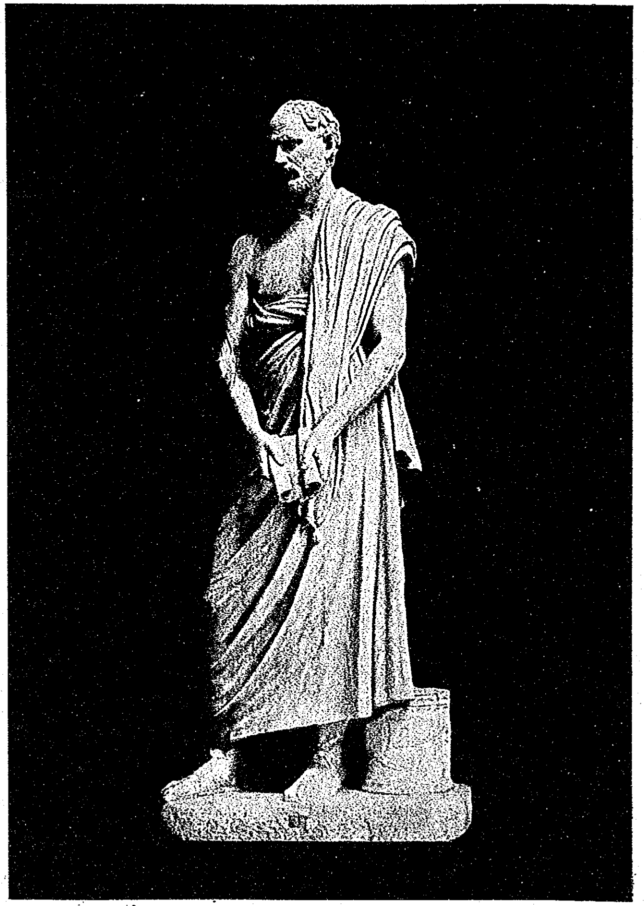
マケドニアの侵略

第五節　是より先き、マケドニア王アンフィリポス、オリントス等

マケドニアの覇業

諸國を取り、マケドニア沿海のギリシア植民地を滅ぼす。是に於て南下して、メガラ・エウボイアを襲ひ、以てアテネの羽翼を絶たんとす、デモステネス之に備ふ。乃轉じて、北プロポンチス西岸の諸國を取り、以てアテネの財源を涸さんとす、ビザンチオン援をアテネに乞ふ、デモステネス海軍を遣はし赴援せしむ、マケドニア王退く。

第六節　三三九年、ロクリス、デルフィの神領を掠む、アンフィクチオニア罰金を課し、マケドニアをして其罪を問はしむ。王フィリポス、ロクリスを平げ、不意にエラテアを取る、エラテアはボイオチアの鎖鑰なり、アテネ震駭す、デモステネスをテーベに遣りて、同盟を結び、以てマケドニア軍を逆ふ。明年ケーロネアの野に烈戰して敗績す。マケドニア王乃アテネと和し、ペロポネ



デモステネス

ソスを徇ふ、諸國皆從ふ獨スパルタ降らず、マケドニア軍ラコニアを焚掠す、マケドニア茲に覇たり。

ギリシア大同盟

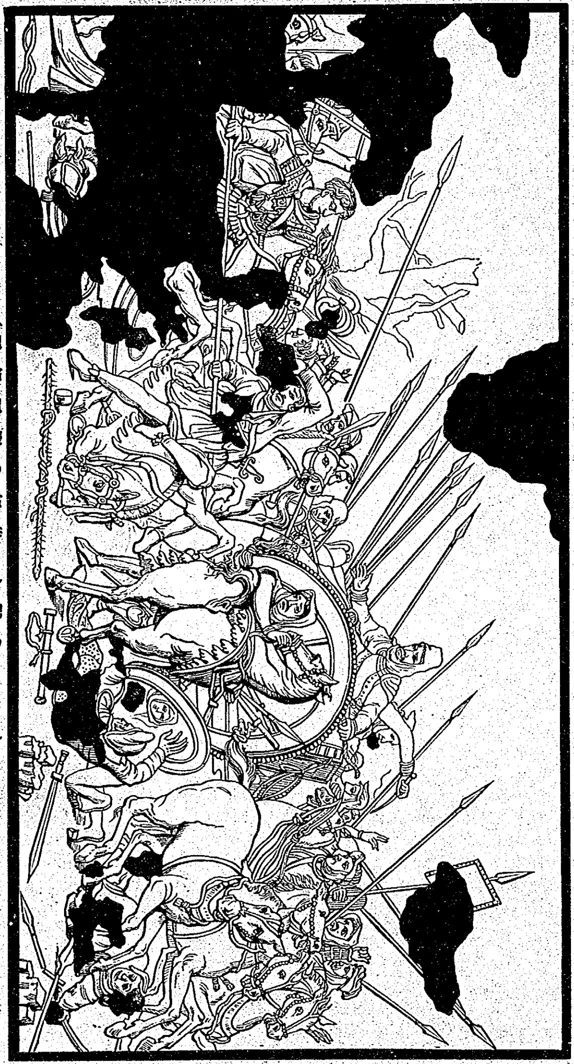
第七節 三三七年、マケドニア王、ギリシア諸國の使節をコリントに會す、スパルタ至らず、王棄てて問はず。全ギリシア大同盟を作り、マケドニア盟主となりて、ペルシアを征する議を決し、先づ二將を發して、小アジア沿海植民地を徇へしむ。明年王其下に弑せられ、世子アレクサンドル立つ、年甫めて二十。

アレクサンドル

第八節 アレクサンドル勇武にして大材あり、アリストテレスに師事し、文學を好む。三三四年父の遺志を紹ぎ、宿將パルメニオン・ペルヂカス・プトレマイオス等を隨へ、大軍を統べて發す。

小アジアの平定

第九節 軍進みてヘレスポントを渡り、グラニコス川にペルシア軍を破る、小アジア定まる。三三三年ペルシア王ダリオス親



イッスの戰（一世紀の寄石細工）

ペルシアの滅亡

ら大軍を率ゐて、キリキアのイソスにマケドニア軍を撃ち、敗績し、母・夫人・子女を棄てて走る、乃エウフラタ河以西の地を割き、償金を納れて和せんとす、許さず。是に於て、パレスチナ・フェニキア降る、獨チル從はず、之を圍む七月にして平ぐ。明年、エジプトに入り、民政長官・守備隊司令官を任じ、ニール河口に、商港アレクサンドリアを置く。

第十節　是に於て、地中海東方の地悉く定まり、强大なる海軍を獲たり、乃艦隊を分遣して、スパルタを伐たしめ、軍隊を補充して、エウフラタ河へ進む。三三一年アルベラと、ガウガメラとの間に、ペルシア軍を破り、スサ・ペルセポリス・エクバタナを取る、ダリオス遠く東北に走り、ヘカトンピロスに至り、其下に弑せらる、アレクサンドル遺骸を獲て、禮を以て之を葬る、ペルシア

亡ぶ。

第十一節 アレクサンドル既にペルシアを定めて父の志を成す、而も其東疆の地未だ服せず。會〻タクシャシラの君、出師を乞ふ、乃三二七年春、インドに入り、パンジァブを取る。三二五年終に將士の言を納れ、ネアルコスをして、海軍を率ゐしめ、親ら陸軍を統べ、相并びてバビロンに旋る。 インドの征服

第十二節 アレクサンドルは、ギリシアの文化、マケドニアの兵學を以て、經緯となし、ギリシアと、ペルシアとを鎔鑄し、バビロンに都して大帝國を建てんとす。是を以て、ペルシアの風俗を重んじ、エジプトの宗教を尊び、要處に新市を置き、諸國の壯士を選拔して、ヘタイロイ隊を編み、大に賜予を厚くして、將士に客土の貴女を娶らしめ、客地の人士を任用して、庶政を掌 大帝國建設の企圖

らしむ。然れども、將士は望鄉の念を斷たず、客土の習俗を悅ばず、邊土の防備に倦みて、皆王の經綸に不平なり、乃或は罪を宥めて故國に還し、或は厚く賜ひて歸鄉を許す。又新港を置きて、世界貿易を奬め、カスピ海・アラビアを探檢せしめて、新市場を開かんとす、而も、意志雄猛にして、身體の健剛之に伴はず、三二三年酒に中りてバビロンに死す、壽三十三、後人其英姿を仰ぎて大王といふ。

第八章　ローマ　カルタゴ

ローマ及カルタゴ

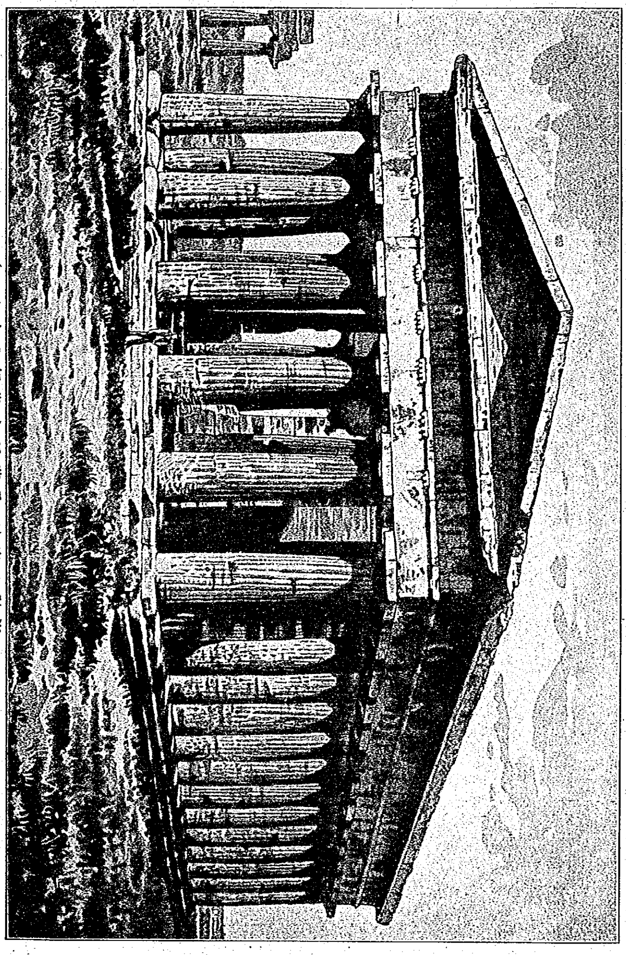
第一節　アレクサンドル、東方に大帝國を建つる時に當り、西方に、二國民の漸く强大ならんとするものあり、一をローマといひ、一をカルタゴといふ。

ローマの國土人民

第二節　ローマは、イタリア中部の西、ラチウムの原に起る、ラチウムはアペニン山の西麓、波狀の斜原にして瘠地なり、チベル河之を貫きて流れ、舟楫の便あり。國民をラチニといふ、丘上・山腹に居住し、一村一國を成す、剛健の氣風を崇び、實務に長ず。

エトルリア人

第三節　アペニン山の西麓、チベルの上流地方に、古へエトルリア人居り、夙くギリシアの文化を傳へ、鑄銅・土木の技に長じ、大聯邦を成す、ラチニ其間に介在し、亦聯邦を成す。ローマは、原とチベル河に臨む、パラチノ岡の一村にして、アルバノ山のアルバロンガの移民なり。ロムルスを國祖として祀り、建國紀元を紀元前七五三年と定む。後祖國を亡ぼし、ラチニ聯邦と和し、エトルリアより獨立し、三九六年ウェイイを取る。後六年、



ペスツム海神の宮（紀元前五六世紀の建立）

北夷ガリ大擧して南下し、ローマを焚掠す。幾許もなくガリ北に歸り、ローマ復興る。

第四節　コンスル　國民の兩階段

初ローマは、エトルリア出身の王を戴きて興る、獨立するに及び、コンスル二名を置き、行政・司法・軍務を總裁せしむ、任期一年なり。國民に兩階級あり、一をパトリキイといふ公民なり、本來の國民にして、總ての公權を專有す。一をプレブスといふ、本來附籍の戻民にして、公權なく、却りて兵役の義務あり。是を以て此兩階級の爭鬩、古より絶えず、プレブスは、事ある毎に、公權を得るに力め、遂にトリブヌス　プレビスを置く、蓋し政務按察官にして、行政を掣肘し、立法を制止する職權を有す。三六六年ルキウス　セクスチウス始めてプレブスより出でて、コンスルに就く、乃プレートルを置き、司法を總裁せし

む、是より諸公職漸くプレブスの手に落ち、爭鬩止むに至る。

サムニテ戰役

第五節 既にして、階級の紛爭漸く跡を絶ち、國力爲に餘裕を生ず、是に於てサムニテ戰役起る。サムニテは、ローマ人と同族なり、南イタリア・ボルツルノ川上流の山間に居り、ギリシア植民地と接壤す。三四三年サムニテ、カンパニアを侵す、ローマ乃カプアの乞を納れ、師を出だしてサムニテを擊破す。三二一年サムニテ將ポンチウス、カウヂウムにローマ軍を破り、全軍を降だす。乃盟を約して、三槍より成る衡門を作り、劒鎧を褫ぎ、槍門を潜らしめて、之を放つ、ローマ永く之を愧づ。二九〇年に至り、サムニテ終に降り、唯、マグナグレーキアなほローマを東視す。

マグナグレーキア

第六節 マグナグレーキア は西岸のキメより、東岸のヒドルンツムに連なる沿海一帶の地、アカイア・イオニア・ドリア人の古

ピロス

植民地なり、ローマ兵之を守備す。獨タレンツム富強を恃みて屈せず、二八二年事を構へて、エピロス王ピロスを招く。二八〇年ピロス至り、ローマ軍を破ること二度、休戰を約して、シチリア島に據る。二七六年再び進み、明年ベネベントに敗績して、イタリアを去る、ローマ乃タレンツムを收む。二七二年マグナグレーキア悉く平ぎ、海軍の要素となる、又幷呑せる要處に、公民を移して屯田せしめ、以て不虞に備ふ、イタリア一統是に於て成る。

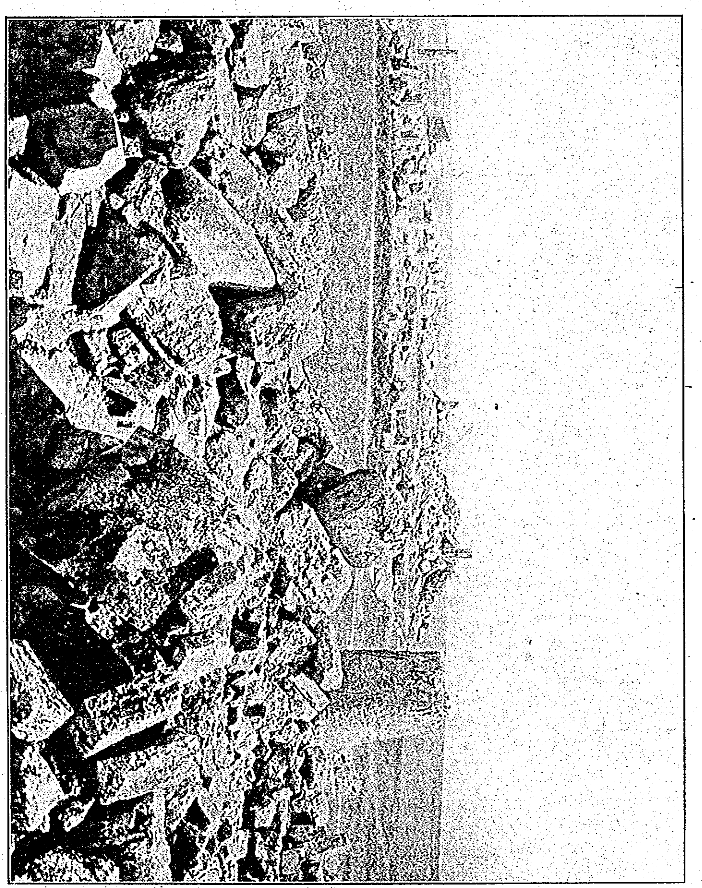
イタリア一統

カルタゴの政體

第七節　カルタゴは、アフリカ北岸ボン崎の西灣に臨む臺地に在り。當時チベル河口、オスチア港より海路二日程とす。是時本國チルス既に衰へ、カルタゴ最盛なり。ローマ人其國民をポエニといふ、蓋しフェニキア人の謂なり、貴族政體を採り、國富み

兵強く、殊に海軍に長ず、文學・美術は其短とする所なり。フニキア衰頽の時に方り、其諸植民地を幷せて首長となり、マルタ・サルヂニア・コルシカ・イスパニアの植民地を奄有し、兼ねてシチリア島の一半を領す。

第八節　四七八年以來、カルタゴ頻にシチリアに寇す、シチリアのギリシア植民地、數〻チランノスを戴き政體定まらず、而してシラクサ常に其衝に當り、之を禦ぐ。三世紀の初、アガトクレス、シラクサにチランノスたり、兵をアフリカに出だして、カルタゴを征す、遂に利あらず、ピロス、タレンツム入援の時シラクサ援を乞ふ、而もエピロス兵マルサラの圍に老い、ピロス、シチリアを棄つ、全島鼎沸して已む時なく、ローマ・カルタゴの二強國、シチリアを爭ひて、相鬪ふに終れり。



セリヌスの古墟

第九章　ポエニ戰役

メシナ

第一節　アガトクレス既に死し、子ヒエロン立つ。父の傭兵に、マメルチニ隊と稱するあり、歸郷の途、メシナに入り、劫掠を恣にす、ヒエロン之を討ち、メシナを圍む、カルタゴ急に兵をメシナに入れ、ヒエロンを撃ち、圍を解かしむ、マメルチニ隊、恐れて救をローマに乞ふ。二六四年ローマ軍至り、カルタゴ兵を破りて、メシナを取り、シラクサを伐ち、守備兵を置きて旋る、第一ポエニ戰役是に起る。

第一ポエニ戰役

第二節　二六三年ローマ大擧してシチリアに入る、全島震慴し、ヒエロン・ローマと同盟して、軍實を供す、カルタゴ兵ジルジェンチに據る、明年僅に陷る。是時、ローマの海軍甚微なり、乃

ヅイリウス

クサンチポス

棧橋を備へたる戰艦百二十隻を造りて、艦隊を編制し、ヅイリウスを海將として、カルタゴ海軍を擊たしむ。二六〇年ヅイリウス、カルタゴ艦隊をミレに破る、是に於て、レグルスを海陸兩軍に將とし、直にカルタゴを衝かしむ。二五六年カルタゴ艦隊、エクノモス崎に敗績す、ローマ軍續きてボン崎に上陸し、カルタゴに迫る、カルタゴ降らんと欲す、獨レグルスの條件頗酷なり、乃客將クサンチポスを拜して上將となし、ヌミヂア騎兵を徵し、二五五年ローマ軍をツネスに擊ちて、大に之を破る、ローマ軍潰え、レグルス虜となる。ローマ敗を償はんとして、艦隊をアフリカに出だす二度、皆風波の爲に破られて果さず。

第三節 是に於て、ローマ姑く海軍に望を絕ち、陸軍を以て

シチリア隸州となる

サルヂニア
コルシカ
イリリア

シチリアを爭ふ、カルタゴなほ島の西隅に保つ。二五〇年メテルス、パレルモに戰ふ、カルタゴ敗績し、レグルスをして和を講ぜしむ、レグルス、ローマに至り戰を勸む、和成らず。二四九年カルタゴ海軍、ドレパヌムにローマ艦隊を滅ぼす。ローマ苦戰する數年、二四二年に至り、再び海軍を起し、明年春カッルス・エガテ島に、カルタゴ艦隊を逆撃して、之を殲す。カルタゴ遂に窮して、シチリアを棄て、捕虜を還し、償金を納れて和す。是に於て、ローマ、シチリアをプロウィンキアと爲す、隸州なり。

第四節　戰後カルタゴ國庫窮乏し、兵士の給料を辨ずる能はず、是を以て、兵士處々に蜂起す。サルヂニアの反兵、救をローマに乞ふ、乃和を破りて、サルヂニアを取り、コルシカを幷せて、隸州を置く。イリリアは、アドリア海東岸の海賊國なり、スクタ

ガリ

カルタゴのイスパニア拓殖

ハンニバル

第二ポエニ戰役

リに都し、コルキラに據る。ローマ之を懲らし、エピダムノス以南の地を割かしめ、事由をギリシア諸國に報ず、アテネ等大に悅ぶ。ガリは、ポー河盆地の沃土に國し、ミラノに都す、ローマの北上を觀て安んぜず、大擧南侵して遂に破らる。カルタゴ亦イスパニアを征して、銀銅鑛を收めんとす、ハミルカルバルカス拓殖の事に當り、セビリア・ウエルバの地方を平げ、女婿ハスドルバル業を紹ぎて、カルタゴ・ノワの軍港を置き、益拓殖を進む、サグンツム怖れて救をローマに乞ふ、乃使節をハスドルバルに遣はし、エブロ河をカルタゴ領の北境と定む。二二一年ハスドルバル死し、ハミルカルバルカスの子、ハンニバル衆に推されて將師となる、年甫めて二十八、乃和を破りてサグンツムを陷る、第二ポエニ戰役起る。

ハンニバル、アルプ山を度る

第五節　ハンニバル驍武にして大略あり、兵を用ふる神の如し、殊に騎兵に長ず。二一八年春、歩騎六萬、戰象三十七を率ゐて發す、ローマ徐にカルタゴを征する策を講ず。十一月ハンニバル氷雪を踏みて、アルプ山を度る、南麓イブレアに達するもの、歩騎僅に二萬六千、戰象殆ど盡く。ローマ始めてハンニバルの計を覺り、急に師を召還して之を禦がしむ、克たず、ガリ悉く叛く。

ファビウス

明年ローマ軍、トラシメヌス湖畔に覆没し、ファビウスをヂクタトールに拜して、國都を防がしむ。ハンニバル避けて南アプリアに出で、火牛の謀を用ひてファビウスの圍を脱れ、二一六年カンネーに、ローマ軍を鏖殺す、南イタリア、カルタゴに降る。是に於て、ハンニバルの武略天下に耀き、ローマの諸將皆其旗を望みて退く。

アルキメデス

第六節　二一四年、ローマ陸軍十六萬、戰艦百五十隻を擧ぐ、ファビウス・マルケルス之に將たり、マルケルス、シラクサを圍む。アルキメデス機械學を應用して敵艦を苦む、二年にして陷り、ジルジェンチ續きて平ぎ、シチリア定まる。ローマ軍カプアを攻む、ハンニバル急にローマを衝きて遂に圍を解かんとす、ローマ城門を鎖して堅く守る、ハンニバル爲すなくして退く。二一一年カプア陷る、乃國人を屠戮して之を懲らす、タレンツム又平ぐ、ハンニバル爲に要港を失ふ。

スキピオ

是より先き、ハンニバル、弟ハスドルバルをして、イスパニアを留守せしむ、ローマ、プブリウスコルネリウススキピオをイスパニアに遣はし、敵の根據を奪はしむ。二〇九年春、スキピオ、カルタゴ・ノワを取る、イスパニアの鎖鑰、ローマに歸す。既にしてハンニバル勢漸く蹙り、弟ハス

スキピオカルタゴを衝く

イスパニア、ローマ領となる

ヌミヂア

ドルバル入援して戰死し、遂に窮して、ルカニアに保つ。二〇四年春、スキピオ海陸軍を率ゐて、カルタゴを衝く、ヌミヂア先づ服す、カルタゴ遂にハンニバルを召還す。二〇二年スキピオ、ヌミヂア軍と合し、ハンニバルとザマに戰ふ、ハンニバル智略を罄して克たず、其全軍を亡ふ、明年和を講ず。是に於て、カルタゴ、アフリカ以外の領土を割き、五十年賦の償金を納れ、戰艦・戰象を讓り、捕虜・戰利艦を返し、ローマの許諾を經ずして、開戰せざるを約す。

第七節 ヌミヂア主マシニサ、先きにスキピオと提携して、其國を恢復し、ローマの後援を恃みて頻りにカルタゴ領を蠶食す、カルタゴ終に忍ぶ能はず、一五二年ヌミヂアを伐ちて敗績す。一四九年ローマ條約違反を以て之を論じ、永くカルタゴの

第三ポエニ戰役

祀を絶たんとす、乃先づ步騎八萬四千をアフリカに出だし、戰艦・軍器を納れんことを要む、カルタゴ命を奉ず。更に四里の內地に移住を令す、是に於て、國民七十萬死を決して起つ、婦女亦髮を斷ちて弓弦の料に充つ、之を第三ポエニ戰役とす。ローマ、スキピオの養孫プブリウス・スキピオ・エミリアヌスを將軍に拜し、ヌミヂアと相結び、カルタゴを伐たしむ。一四六年に至り、カルタゴ終に陷る、乃市街を焚滅して隴圃となし、隷州アフリカを置く。

第十章 アレクサンドル死後の東方諸國

第一節 アレクサンドル、暴に死して嗣なし、諸將、王后ロクサネを奉じ、遺腹の子生るるを待つ、之をアレクサンドル二世と

アレクサンドルの大帝國分裂

す。宿老互に轢り、爭亂相次ぎ、復寧歳なし、初ペルヂカス アンチゴノス最顯る。三〇六年アンチゴノス、自ら王と稱す、諸總督僉之に倣ふ。三〇一年アンチゴノス、イプソスに敗死し、アレクサンドルの大帝國、終に分裂して、マケドニア・エジプト・シリアの三大國となる。

アカイア

第二節

ギリシアのアカイア地方に、元と十二國より成る聯邦あり、マケドニアの盛時、解散したるも、二八〇年パトラス等四國復之を興す。二五一年アラトス、シキオンを率ゐて、之と合す、後コリント・メガラ又之に加はる。聯邦漸く大なり。ストラテゴスを置く、聯邦元帥なり。二一三年アラトス死し、フィロポイメン代りて元帥たり、スパルタ加盟す。是に於て、聯邦ペロポネソスを領し、僅にギリシアの遺風を傳ふ。

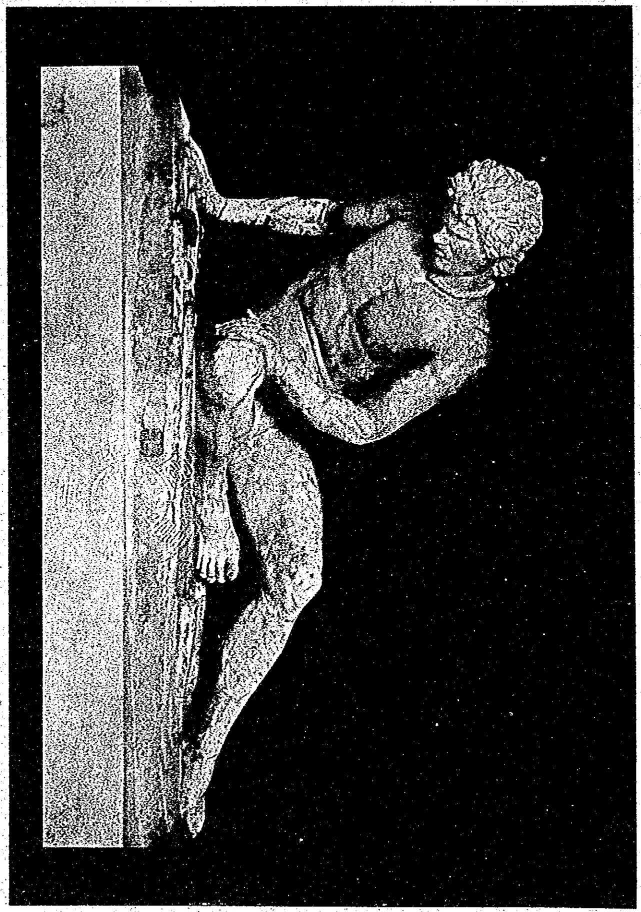
マケドニア

第三節

マケドニアに於ては、カサンドル、アレクサンドルの妹婿を以て、王室を誅鋤し、三〇九年大王の遺孽を絶つ。是に於て、簒奪相次ぐ。二七二年以來、アンチゴノスの裔孫之に王たり。フィリポス五世に至り、コリント・アルゴス等を取り、アカイア・シリアと相結び、アテネを伐ち、エジプト領を侵す。エジプト・アテネ等、ローマに訴ふ。乃マケドニア・シリアの二王をローマに召す、至らず、ローマ已を得ず、先づマケドニアを征す。一九七年フィリポス降り、本國以外の領土を割き、償金を納れ、永くローマに屬す。王死し、長子ペルセウス立つ。戰再び起る。一六八年夏、エミリウス パウルス、ピドナに夜戰し、ペルセウス降る。乃珍寶內帑を收め、マケドニアを割きて、四共和國を置く。後一四六年に至り、隸州となす。

アカイア聯邦滅ぶ

是年アカイア聯邦又亡ぶ。是より先き、スパ



ガリ戰士

ルタ、ローマと通じ、離合常なし、前年援をローマに乞ふ。ローマの使節、乃聯邦會議に臨み、スパルタ・コリント・アルゴス等の分離を要む、アカイア人怒りて、使節を辱め、スパルタ人を殺す。ローマ兵進みて、ギリシアを隷州となし、アカイアと名く。

ローマ、ギリシアを隷州とす

エジプト

第四節　エジプトは、三二三年プトレマイオス之に總督として、アレクサンドリアに治し、九世十三代に傳ふ、國富み兵强し、殊に海軍を以て鳴る。フェニキア・キプロス・キレネ其隷州たり。小麥を作り、カヤツリ紙を産し、インド・アラビア・ベルベラの貨物を集散して、商業世界に冠たり。二八三年死し、子フィラデルフオス立つ、賢明なり父の志を紹ぎて、アレクサンドリアにモウセイオンを置く、學問所なり所内に圖書館あり、詩文四十萬卷を藏す。ギリシアの大家を聘し、優禮を以て之を待つ、詩文の

モウセイオン

エジプトの文學

シリア

ペルガモン

批判是に始まる。是に於て、アレクサンドリア學藝の焼點となり、數學・星學・地理學蔚然として興る。

第五節　シリア　シリアは、三〇一年セレウコス之に據り、十一世二十二代に傳ふ。其領域西地中海沿岸より、東インドス河に至り、北黒海・ヤクザルト河より、南インド洋に及ぶ。北シリアに、アンチオキアを建てて、西都となし、チグリス河に、セレウキアを置きて、東都となす。二八一年死し、子アンチオコス一世立つ。ガリ、小アジアに寇して、ガラチアに國し、アタロス朝の祖、フィレテーロス又ペルガモン國を建つ。後美術と革紙とを以て聞こゆ。二六一年死し、子アンチオコス二世立つ、庸暗なり。バクトリア・ソグヂアナ・パルチア叛きて自立し、シリアの疆域、歳々蹙る。孫アンチオコス三世の時、シリア復振ひ、小アジア沿海及トラキア半

ハンニバル

島のギリシア植民地を取る、ローマ之を詰る、應ぜず。ハンニバル、シリアに客たり、王甚之を重んず、ローマ反間を放ちて、之を傷く。一九三年ローマ戰をシリアに宣す、ハンニバル策を獻ず、用ふる能はず。一九一年テルモピレに敗績して歸り、逸居して備へず。明年スキピオの弟、ルキウスとマグネシアに戰ひ、復敗績す。乃小アジアを割き、十二年賦の償金を納れ、戰艦・戰象を獻りて和す。是に於て、ローマ、小アジアをペルガモンとロードスとに分與して、勳功を賞し、兼ねてシリアを抑へしむ。

ロードス

バクトリア

第六節　バクトリアは、ヒンヅークシ山間溪谷の地、太古のバクヂなり。氣候寒く、物産に乏しきも、オクス・インドス兩河水源地の間にありて、ペルシア・インド交通の衝に當る。是を以て、アレクサンドル、ギリシア人を移して、インドとの連絡を完う

ソグヂアナ

せしむ、後シリアに隷す。二五〇年頃、ヂオドトス叛きて自立し、子ヂオドトス二世に傳ふ、ソグヂアナは、太古スグダの地、今のサマルカンドなり。地味肥え、物産豐にして、常に北夷に鏡はる、實に北境の重鎭たり。二五〇年頃、エウチデモス此に自立し、後バクトリアを幷す。二〇〇年頃、デメトリオス嗣ぐ。後十數年エウクラチダス取りて之に代はる。パルチアのミトラダテス一世に至り、バクトリア亡ぶ。

バクトリア亡ぶ

パルチア

第七節　パルチアは、カスピ海の東南隅にして、所謂カスピ關東方の地なり。國人をパルドワといふ、アイリア・ダハの雜種なり、慓悍にして騎射に長ず。二五〇年アルサクス・チリダテス兄弟、シリアに叛き、パルチアに據り、ヘカトンピロスに都す、今ダムガン附近の地なり。後百年にして、チリダテスの孫、ミトラダテ

ラオコーン（アゲサンドロス作）

ス一世出て、メヂア・ペルシアの故地を平げ、エウフラト・インドス兩河間の地を奄有し、當時の世界を二分して、其一を保つ、漢史の安息國是なり。

ギリシアの文物

第八節　ギリシアの文物は、アレクサンドル以後の時代に於て、特異の發展を爲し、學科は益分れて、美術は壯麗多趣を貴ぶ。哲學家にエピクロス・ゼノン、史家にベロソス・マネト、批評家にアリスタルコス・ゼノドトス・ゾイロス、植物家にテオフラストス、數學家にエウクリデス、星學家にヒッパルコス・プトレマイオス、物理家にアルキメデス、地理家にエラトステネス、醫家にガレノスあり。畫家アペレスは、神韻と寫生とを合し、彫刻家リシポス・アポロニオス・アゲサンドロス等意匠多趣を極む。アレクサンドリアペルガモン・ロードス美術を以て尤顯る。

第十一章　ローマ共和制の末路

第一節　ローマ既にカルタゴ・マケドニア・アカイアを滅ぼし、シリア・エジプトを屈す、東方の積富國都に聚まり、元老功を負ひて威權自ら重く、富豪富を恃みて私利を營み、賄賂公行して法令效を失ふ。是に於て、顯貴富豪の徒、公田を占有し、貧賤の輩纔に飢寒を凌ぐ、貧富の懸隔漸く甚しく、奢侈淫靡日々に風をなす、共和の精神茲に衰へ、貧富の爭鬪隨ひて生じ、朋黨互に鬩ぎ、政體終に頽る。

グラックス

第二節　一三三年チベリウス　センプロニウス　グラックス、スキピオの外孫を以て、トリブヌス　プレビスとなり、復頒田の舊制を行ひ、以て貧民を救助せんとし、憲法を犯して其議を成立せ

しむ、貴族黨以て王位を覦ふと爲し、之を殺す。弟ガイウス能辯なり、一二三年每月穀物を貧民に分ち、元老院の裁判權を褫がんとす、貴族黨に掩擊せられて自殺す、民黨漸く志を養ふ。

ユグルタ

第三節　ヌミヂア僭主ユグルタ、ローマ元老院議官を買收して、ヌミヂアを簒奪す。トリブヌス プレビス メンミウス醜事を發き、征討を要む。一一一年元老院已を得ず師を出だす、ユグルタ、コンスルを買收して和す。メンミウス又之を發き、僭主を召し罪を糺さんとす。僭主ローマに至り、メンミウスの同僚を買收して實を吐かず、且マシニサの遺孫を刺さしむ、乃退去を命ず。僭主嘲りて曰く、『ローマは賣品なり、買ふものあらば忽に亡びんのみ』と、ローマ、軍を擊ちて之を降だし、槍門を潛

マリウス

らしめて之を放つ。ローマ愧ぢて軍紀を肅し、復僭主を伐つ、僭主敗走す。一〇七年國民ガイウス マリウスを擧げてコンスルとし、僭主を討たしむ、僭主國を棄てて走り虜にせらる、亂平ぐ。マリウスは貧賤より起り、傲放武に習ふ、民黨の領袖たり。

キンブリ
テウトニ

第四節　是時ゲルマニのキンブリ・テウトニの二部、國民を擧げて、移住を企て、今のカリンチアに南下し、テウトニは此より西に轉じて、スウィス・フランスを經てイスパニアに入り、キンブリは、直に北イタリアに至らんとす、皆妻孥を携へ家財を提ぐ、ローマ軍禦ぐ能はず、國民震駭し、連りにマリウスをコンスルに擧ぐること五度、以て北夷の入寇を防がしむ、蓋し異例たり。一〇二年マリウス、テウトニをエクスに鏖殺す、婦女亦慣鬪し

デマゴーゴス
ミトラダテス

て之に死す。乃轉じてキンブリを擊ち、之をベルチェリに殲滅す。マリウス功成り民黨の勢張る。デマゴーゴス漸く跋扈す、ルキウスコルネリウススルラ是に於て出づ。デマゴーゴスは眼中に國家なく、愚民を使嗾して私利を營む、政治屋の謂なり。

第五節　一三〇年ポントス主ミトラダテス七世立つ、梟雄にして大志あり。タウリ半島・コルキスを領し、シノペに都す。是より先き、ペルガモン主、アタロス三世昏愚なり。ローマ讓狀を帶すと稱して其國を廢し、一三三年隷州アジアを置く。ポントス主パフラゴニア、カパドキア・ビチニア・フリギアを征服し、ローマ總督を虜にして、都をペルガモンに遷し、八九年小アジア在留のイタリア人八萬を殺戮す、ローマ小アジアを失ふ。

第六節　ミトラダテス又ローマの內訌に乘じ、トラキア・マケド

スルラ

ニアを侵し、アテネを降して之に據り、ギリシアを定む。八八年スルラ、コンスルに擧げられ、ポントスを討たんとす、マリウス之を爭ひて敗れ、アフリカに遁る、スルラ乃出征す。コンスルキンナ民黨の爲に圖り、マリウスを迎ふ、マリウス大に貴族黨を殺戮して怨を報ゆ、幾許もなく死す。

第七節　八六年スルラ進みてアテネを陷れ、ポントス軍を破り、小アジアに入る。是時ローマ軍に復軍紀なし、士卒皆戰利品の爲に戰ふ、スルラ已を得ず刼掠を許す、是を以て、ローマ軍の過ぐる所、金銀空しく殺屍相重る、ミトラダテス和を請ふ、乃悉く侵地を吐かしむ。八三年師を旋し、部將グネウス・ポンペイウス等を諸州に遣りて、マリウスの餘黨を擊たしめ、ローマに入りて民黨を殄滅す、殺さるる者前コンスル十五、元

梟雄擅政の時代

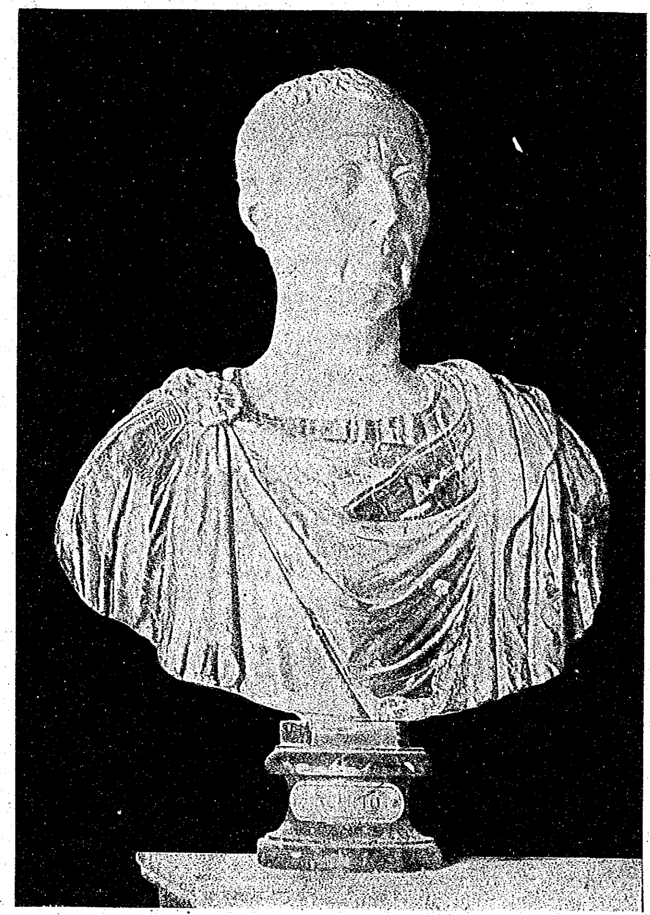
老院議官九十、騎士二千六百、公民十萬餘に上る。是に於て終身デクタトールとなりて政務を總攬し、元老院の組織を革めて、其權勢を復し、トリブヌスプレビスの專權を抑へ、騎士の跋扈を制し、ケンソルの職權を殺ぎ、警察法を布きて風紀を正す、後職を辭し、七八年死す。政體を將に頽れんとするに支へ、數年國民安を樂むを得たるはスルラの功なり。

第八節　スルラ死して成を守るものなし。ポンペイウス、クラッスス等皆凡庸にして、恒產恒心なき公民を御する能はず、徒に之に媚びてスルラの制度を壞り、デマゴーゴスの專橫を扶く。是を以て共和の精神日々に銷磨して、梟雄擅政の時代に移る。僅にマルクスツルリウスキケロあり、忠誠なり、巧にポンペイウス・クラッスス・ガイウスユリウスケーザルと交り、其信任を得

ローマの地方政治

たり。キケロ法學・哲學・文學に精通し、能辯術に於て一代の巨匠たり。

第九節　是時に當り、ローマの地方政治又腐敗を極めたり。ローマの制度、イタリア本部以外の地に隷州を置き、總督通判を任じて政務を掌らしむ。總督は軍國の事を統べ、通判は訴訟を聽く、總督に屬官の隷するなく、自ら幕僚を養ひて庶務を理め、通判は自ら書記を使ひて文案を主らしむ。稅務は政府自ら之を執らず、富豪の騎士をして之を請負はしむ。是を以て賄賂盛に納れられ、甚しきは總督にして海賊と結託し、賦金を分竊するに至る。隷州中アジア最富む騎士等之を奇貨とし、競ひて其收稅を請負ひ、稅金を前納して、年五割の利を貪り、利を元に合して暴斂す。郡市爲に困弊して、公有物



ケーザル

を剝がれ、富豪爲に産を蕩盡し、一家奴隷となりて流離す、而して政府怪まず、國民憫まず、以て尋常の事と爲す。ポントス王が、嘗てアジア總督をして、鎔けたる黄金を嚥ましめたるは抑故あるなり。

第十二章　ケーザルの業

ケーザルの人格

第一節　ガイウス ユリウス ケーザルはローマ第一の人なり。内剛に外柔に、騎馬・擊劍・水泳に習ひ、詩文・法學・言語學・土木學・能辯術・交際術に長じ、機を隱微の中に察し、策を生死の際に廻らし、武將・政治家・立法家・曆學家として、不磨の大統を千載の下に垂れたり。今ドイツ帝をカイゼルといひ、ロシア帝をツァールといふは、ケーザルの轉訛なり。ケーザル素と虚弱に

して清痩なり、飲食を節し、武藝を練りて僅に其健康を保つ、而も精力衆に超ゆ。マリウスの妻姪、キンナの女婿たり、幼にして父を喪ふ。母アウレリア賢にして才あり、善く之を鞠育す。スルラ入都の時、年甫めて十七、スルラに屈せず、將に殺されんとす、他郷に流寓して、纔に身首處を異にせざるを得たり。都人士僉爲に哀を乞ふ、スルラ曰く、『卿等自ら言ふ所を知らず、ケーザル年少しと雖、其才マリウスに優れり』と、枉げて之に從ふ。スルラ死して後、ローマに歸り、六八年イスパニア通判たり、秩滿ちて元老院に入る。乃專らポンペイウスを推し、唯都人士の歡心を迎ふるを之れ力め、債百三十萬圓を負ふに至る。六二年イスパニアに總督たり、債主放たず、クラッスス證人となり、纔に任に赴くを得たり。是に於て、イベリア半

島の未だ服せざる地方を平げ貲財を積み以て負債を辨ず、ケーザルの名漸く高し。

ポンペイウス

第二節　是より先き、ポントス主ミトラダテス、復師を起してアジアを取る。七二年ローマ軍に破られ、國を失ひてアルメニアに走る。ローマ、ポンペイウスを征東將軍に拜す。六六年ポンペイウス、パルチア王フラワルチス三世を說きて、ローマと同盟し、アルメニアを侵さしむ。ポントス主タウリ半島に走り、パンチカパイオンに自殺す、小アジア定まる、アルメニア降る。是時シリア亂る、ポンペイウス治まらざるを名として國を廢し、隷州シリアを置く。パレスチナのマカベ朝、又相鬩ぎ、ローマ軍を招く、イェルサレム陷る。是に於て、東方の小國皆貢を納れ、ローマの疆域、エウフラト河に及ぶ。六二年ポンペイウス師を旋す、貴族

シリア亡ぶ

黨其兵を擁して政を擅にせんを恐る、民黨亦其威を振ひて跳梁せんを懼れ、ケーザルに依る。ポンペイウス乃二黨の意を安んぜんと欲し、軍を解きてローマに入る。元老院議官等其優柔なるを視て、之を輕侮し、悉く其請ふ所を却く。是に於て、ポンペイウス己の威望已に地に墜ちたるを知り、ケーザルの民黨と善きを利用し、以て政權を握らんとす、第一三名委員執政の代茲に起る。

三名委員執政

第三節　ケーザル固よりポンペイウスの優柔にして爲すなきを知る、乃ち先づ頻に迎合して其信任を得、ポンペイウスとクラッススとの不和を解き、五九年二友の後援に依り、コンスルと爲る、所謂トリウムウィリ是なり。トリウムウィリは三人男の意、三名より成る政務委員をいふ。是に於て、政權元老院より自

選の政務委員に遷る。明年ケーザル出でて北イタリアのガリ國、及南フランスに總督たり、ガリは、ケルチの大族なり。四世紀に始めてイタリアに南下し、三世紀にギリシア・小アジアに入り、東北ライン河・西大西洋・南ピレネー・アペニン二山脈の間に居住す。民情桀鶩にして驕奢を悦ぶ、貴族富を挾みて政を專にし、下民は富豪に寄りて衣食す。當時ローマ、ポー河盆地に隸州ガリアキサルピナ、ローヌ河下流沿海地に所謂プロウィンキアローマナを置く、自餘のガリ居住地はなほ獨立國たり。ケーザル既にプロウィンキアに總督たり、大に版圖を拓かんとす。

ガリア、ブリタニア定まる

會、ライン河上流ユラ山間に居住するケルチ族のヘルウェチ部を擧げて西に移る。ガリ援をローマに乞ふ、是よりケーザル師を出だす。八年悉くガリを降し、ゲルマニ族のスウェビを懲

し、イングランドのブリトンを討ち、ガリ居住地を擧げてローマの領土と爲す。

ルッカ會合

第四節　是時に方り、ポンペイウス・クラッススはローマに留り、國務に當る。デマゴーゴス蜂起し、跋扈し、無賴の徒良民を虐ぐ、ポンペイウス制する能はず、貴族黨稍勢を復す。五六年ケーザル兩委員とルッカに會し、ポンペイウスをイスパニアに、クラッススをシリアに總督とす。五三年クラッスス敗死す。ポンペイウス、ケーザルを忌み、遂に貴族黨を率ゐて之を陷れんとす、ケーザル豫め之に備ふ、果さず。貴族黨ポンペイウスを煽ぎ、私戰を起さんとす。四九年ケーザル既に南下して、ガリアキサルピナの南境、ラウェンナに駐營す、情報を得て、書を元老院に寄す、意甚謙なり。ポンペイウス派、必ず戰はんと欲し、强ひて議官等を

して『ケーザル當に不日總督を辭くべし、否らざれば國敵を以て論ぜらるべし』と議定せしむ。ケーザル乃意を決して、ローマを衝く、ポンペイウス等狼狽してエピロスに遁る、イタリア定まる。是に於て、イスパニアを清めて、後顧の憂を絶ち、ポンペイウス等を逐ふ。敵軍之をテッサリアのファルサルスに擊ちて敗績し、貴族黨亡ぶ。ポンペイウス、エジプトに走り、國人に殺さる。居ること數日、ケーザル亦至る、國人其首と印とを獻ず。ケーザル泣きて之を受け、刺客を誅し、紀念柱を設け、廟を建てて之を祀る、アフリカ續ぎて平ぐ。

ポンペイウス死す

第五節　天下既に大に定まり、地中海ローマの領海と爲る。國民ケーザルの功を頌して、終身デクタトールに擧げ、インペラトールの號を許し、國家の大權を總攬せしむ。是に於て、ケーザル

大政の革新

民に臨むに寬仁、敵を待つに大度を以てし、庶政を釐革し、積弊を蕩排し、荒蕪を拓殖し、曆法を改正し、共和制の名を存して、王制の實を行ふ。而して意未だ滿たず、私に王位を覦ひて、自持する頗る尊大なり、國人竊に悅ばず。四四年三月十五日盜ケーザルを殺す、ケーザル能く任じて疑はず、終に害に遭ふ、年五十六。子なし、妹孫オクタウィアヌスを養ひて嗣とす、ローマ帝國の太祖、アウグスッス是なり。

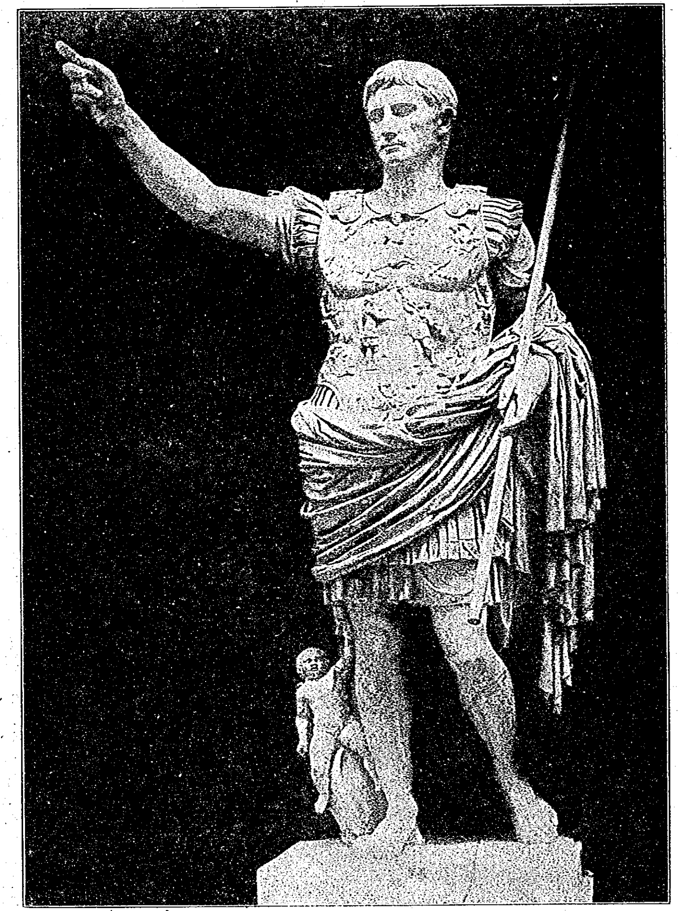
盜ケーザルを殺す

第六節　ケーザル斃れ、貴族黨の餘類キケロ等相慶す。嗣子オクタウィアヌス年甫めて十八、エピロスのアポロニアに遊學して家に在らず。コンスルアントニウス、靈柩をフォールムに奉じ、悲憤の弔辭を述べて火葬す。衆、盜を寸斷して甘心せんとす、既に遁る。是に於て、アントニウス、ローマに號令して大に威福を

アントニウス

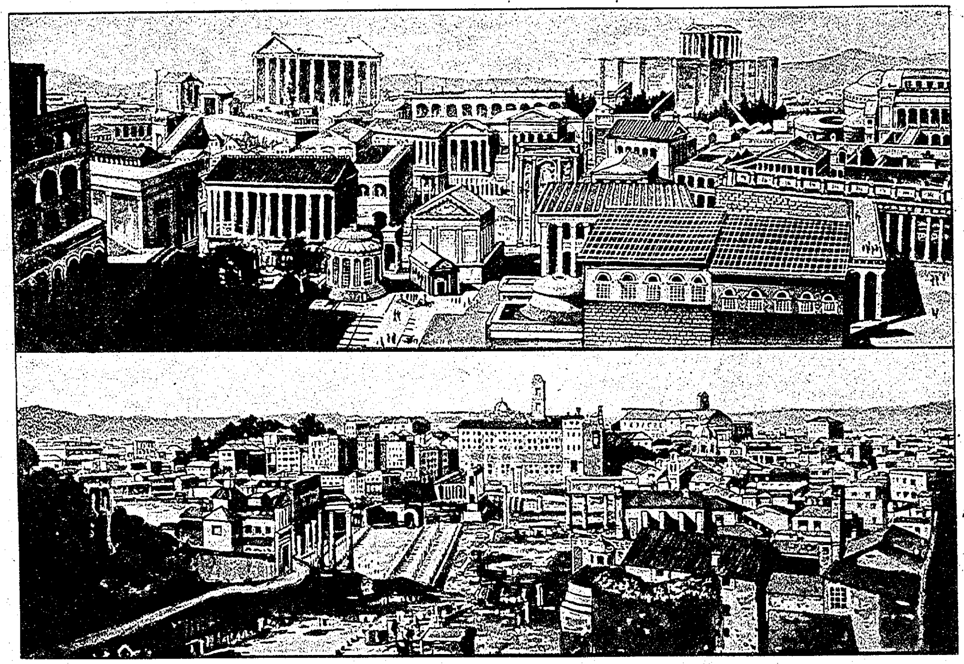
オクタウィアヌス
第二三名委員執政
ブリンヂシ會合

恣にす。幾許もなく、オクタウィアヌス歸り、父の遺命を奉じて、大に市民を賑はす、市民悅服す。オクタウィアヌス深沈にして大志あり、善く慮り、善く謀り、謙讓して德望を養ふ、貴族黨亦服す。四三年オクタウィアヌス・スアントニウス、ガリア總督レピヅスと、ボロニァに會し、第二三名委員執政を行ふ。乃貴族黨を誅夷して、復遺孽なからしめ、以て父の讐に報い、四〇年アントニウスとブリンヂシに會し、ローマの領土を二分して、イリリアのスクタリを境とし、以東をアントニウスに與へ、以西を自ら取り、イタリアを共有す。アントニウス、エジプト女主クレオパトラに惑ひて、シリア・フェニキア・キリキア・キプロス・アルメニア・アフリカを與ふ、將士不平なり。三二年オクタウィアヌス、アントニウスを彈劾す、元老院アントニウスの官爵を褫奪し、戰をエジ

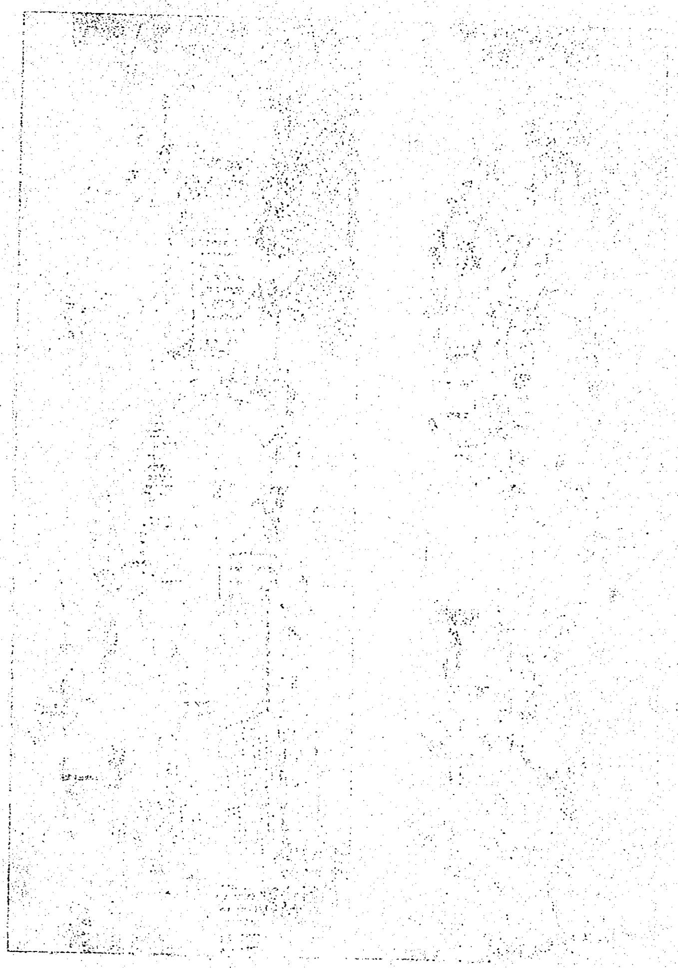


オウグスツス（四十五歳の時の像）

ローマ都フォールム（上段復舊圖.下段現在圖）



ローマ都フォールム(上段復舊圖.下段現在圖)



プトに宣す。三一年アントニウス、アクチウムの海戰に敗れ、エジプトに走りて自殺す、エジプト亡ぶ。

エジプト亡ぶ

第十三章 ローマ帝政時代の初期

第一節 三〇年政權爭奪の亂始めて熄み、大權オクタウィアヌスに歸す。國民泰平を思ふ切なり、元老院オクタウィアヌスにインペラトールの稱を許す。オクタウィアヌス年僅に三十二、謙德を守りて之を用ひず、後三年、之を終身とし、アウグスッスの尊號を與ふ、尊勝の義なり。是より漸次諸要職を兼ね、大政を統ぶ、而も猶首席元老を以て自ら居り、殊禮を以て元老院議官を遇し、恩賚を以て市民を撫で、大土木を起して業を遊民に授け、國家の經濟を理めて、國民の安堵を之れ圖る、史家

アウグスッス

此時より後を帝政時代といふ。

邊境の防備

第二節 アウグスッス、乃父の平定せる疆域を守らんと欲す、獨パルチア・ゲルマニの侵略を恐る。乃先づパルチアに說きて、國威を既に墜ちたるに揚げ、エウフラト河を東境となす。次に北境を安んぜんとして、スウィス東部・チロール・オーストリア西部・南バワリアを平げ、ライン右岸の地を取りて隷州を置き、アウグスブルグ・ケルンを重鎮と定む。後トラヤヌスに至り、ドナウ河外長城・ライン河外長城を築き、屯田兵を置き、以て邊境の防備に充つ、長城をリメス、要塞をカステルムといふ。連鎖をなして北境を掩護し、植民地其裏にあり、今兩河の兩岸地に大市多し、皆ローマの置く所なり。

內治

第三節 アウグスッス意を內治に用ひ、國都を十四區に分ち、令尹を任じて警察の事を掌らしめ、近衛總督を補して、プレトリアニ兵及イタリア駐在の兵を率ゐしむ、倶に顯職たり。アグリッパ・メーケナス宰輔となり、遊民を四方に移し、孔道を開き、橋梁を架け、港泊を築き、上水・下水を修め、殿堂・浴場・興行場・圖書館・裁判所・里程銅標・日光時辰柱を起し、大に學藝・實業を奬む。

黃金時代

是に於て、ラテン文學燦然として著る、詩人にウェルギリウス・ホラチウス・オウィヂウス、史家にリウィウス・トログス・ポンペイウスあり、キケロ時代の散文と比して遜色なし、後世此二期を合して、ラテン文學の黃金時代といふ。アウグスッスの後、詩人にルカヌス・マルチアリス・ユウェナリス、文人にクインチリアヌス・スエトニウス、哲學家にセネカ・エピクテッス・マルクス・アウレリウス、史家にクルチウス・タキッス、博物家にプリニ

銀時代
ローマ法學の五大家
ネロ
ウェスパシアヌス

ウス、地理家にポンポニウスメラ、建築家にアポロドルスあり、皆大家を以て知らる、此期を前期に比して、銀時代と云ふ。殊に法學は、ローマ人の大成する所、ガイウス・パピニアヌス・パウルス・ウルピアヌス・モデスチヌスあり、名最顯る。

第四節　紀元後十四年、アウグスッツス死す、壽七十六。子なし、后リウィア悍黠なり、帝の三孫を殺し、先夫の子、養子チベリウスを立つ。後三傳してアウグスッツス五世の孫、ネロ立つ、セネカ傳たり、敎ふる能はず、詩歌・音樂の末技に耽り、閨門甚治まらず、國民頗る之を輕んず。六八年邊帥叛き、禦ぐ能はず、自殺す、アウグスッツスの血統終に絶ゆ。是に於て、帝位を覦ふものゝ、プレトリアニ兵を買收して起つ。明年ウェスパシアヌス、エジプトに據りて天下を取る、儉約にして學藝を勸め、國都の區

小學の嚆矢
チッス
ブリタニア平ぐ
トラヤヌス

にレトールを置き、文學を公民に授けしむ、國家小學を設くる嚆矢たり。死し、子チッス立つ、賢明なり、先きにユダヤの亂を撥め、位に登りて仁政を施く、國民帝を慕ひて、『人類の慈愛』と呼ぶ。二年にして死し、弟ドミチアヌス立つ、不肖なり、終に后の爲に殺さる。是時アグリコラ、ブリタニアに總督たり、イングランドを蕩平して、スコットランドに入り、グランピア山に至りて歸る。ドミチアヌス死して、元老院、議官ネルワを擧げて帝となす。九八年死し、養嗣子トラヤヌス立つ。

第五節　トラヤヌスは、アウグスッツスに亞ぐ英主なり、司法を平にし、隸州を撫で、國境を固め、水路を鑿ち、港泊を築き、クイリナル岡の脊を夷ぐる十四丈、長方形の平地一萬二千餘歩を開きて、フォールムトラヤニを設け、以て交通に便にし、兼て

ダキア

パルチア親征

裁判所・圖書館・凱旋門を建つ、壯麗國都に冠たり。國民帝を徳とし、紀念柱を獻ず、柱白大理石を以て作る、頂に帝像を置く、高共に十四丈、山脊鑿夷の深と等し、面に帝がダキア平定の功を浮彫にす、柱今猶存す。是より先き、ダキ今のホンガリア東部・トランシルワニア・ローマーニアの地に據る。ドミチアヌス歳幣を納れて之と和す、帝愧ぢて幣を贈らず、ダキ乃南侵す、帝親らダキを伐ちて之を降だす。後又入寇す、親征して終にダキを亡ぼし、隸州ダキアを置き、ツルヌセベリヌに大石橋を架けて、ドナウ河を渡り、橋畔よりロシアのアッケルマンに至る、長さ二百里の長城を築き、國民を移して拓殖せしむ。一一二年パルチア王ホスロー立ち、ローマの封じたるアルメニヤ主を逐ふ、帝又パルチアを親征す。一一六年帝アルメニア・

ハドリアヌス

アントニヌス・ピウス・マルクス・アウレリウス

アッシリア・メソポタミアを取り、パルチアの南都クテシフォンを陷れ、歴代の黄金王冠を收む。明年病を陣に獲て師を旋し、キリキアに死す、壽六十五、國民永く其善行を頌す、養嗣子姪ハドリアヌス立つ。

第六節　ハドリアヌス聰明なり、建築術に長じ、名をアポロドルスと等くす、殿堂多く帝の手に成る、今猶存するパンテオンはアグリッパの銘あるも、實に帝の改築する所なり。帝又親く國土民情を觀て、治を圖らんと欲し、天下に巡狩し、殊にアテネ・アレクサンドリアに奄留して、學藝を視る。一三八年死し、養嗣子アントニヌスピウス立つ、在位二十三年、天下大に治まる。一六一年死し、養嗣子マルクスアウレリウス立つ、ハドリアヌスの妹子なり。帝は有德の君子、夙く哲學を研鑽し、ストア派

倫理を奉じ、位に登りて躬ら之を行ふ聖主の稱あり。是時ゲルマニの族マルコマンニはボヘミアに、クアヂはモラウィアに居り、一六七年南下して、イタリアに逼る、帝親征する三度北夷を窘めて和を乞はしむ。而も業未だ成らずして、一八〇年ウィーンに死す、壽六十。子コンモヅス立つ、暴虐なり、后に弑せらる。

ローマの宗教

第七節　ローマ人は、素と多神教を奉ず、宗旨甚ギリシア人に似たり、天神・地祇を崇め、神祇の使禽を敬ひ、神祇長官卜占を主る。其諸國を併呑するに及び、信仰の自由を許して、敢て干渉せず、國家・宗教兩立の主義を採る。

イエスキリスト

紀元前四年イエスキリスト、ユダヤのベテレヘムに生れ、ユダヤ教を改革し、一神教を唱へて、世界の救世主と號す、

キリスト教の本旨

意蓋風俗の頽廢を慨き、下民を教

化し、無縁の衆生を濟度するに在り。是を以て譬喩を用ひて法を説き、奇瑞を示して信を起さしめ、専孝貞・慈悲を勸め、他力に依りて、安心立命の心地をなさしめんとす、ユダヤ人其説を悦ばず、治安妨害を以て之を論じ、磔刑に處す。弟子等東方諸國に説法す、之をアポストロスといふ、使者の義なり。

ペテロパウロ

ペテロ・パウロ最名あり、信者を個人の家に集めて説法し、又は書翰を信者に寄せて教化す、其説漸くギリシア哲學を雜ゆ、下民之を信ずるもの漸く多し。而して信者概無學頑冥にして、事理を辨へず、國家の祭典を侮り、火葬の舊俗を惡む。故に、教育家に棄てられ、政治家に顧みられず、國民に憐まれず、ネロの時、政策の犧牲となりてより以來、屢、抑壓せらる。

第十四章　パルチア　ペルシア　ローマ

パルチア

第一節　パルチアは、疆域を上十一州下七州に分ち、州に總督府を置く、文武の庶政を掌る。王の尊號を諸王の王といふ。王は大元帥として兵權を握り、行政・司法・祭祀の首長として、大權を統ぶ。

商工業

商工業を以て國を建て、シナの絹・絲、バビロンの製革・刺繍、アラビアの香類、インド・メルフの製鐵、インドの象牙・寶石、其他眞珠・黒檀・製藥・精布等の貨物を取扱ひ、毎年九月の初、メソポタミアのバトネーに大取引場を開き、諸國の商賈を集めて之を聚散す、シナの絹・絲尤も巨利あり。パルチア、絹・絲を專賣せんと欲し、屢〻ローマと交戰するに至る、是を以て、國家富強なりと雖も、

國俗

國民は堅く舊俗を守りて、遊牧尚武の風を重んじ、文學を嗜まず、日常の事を皆馬上に辨じ、寢食の間も尙佩刀を解かず、其馬は駿足を以て鳴り、其箭は能く鐵甲を貫く、王侯と雖も必ず自ら矢鏃を磨く。軍隊は騎兵より成る、弓箭・長槍を用ひ、鋼鐵製魚鱗式の鎧を擐る。宗教はザラツストラ教にして、日・月・星・火・水・土を崇む、日はミトラスにて最尊く、月之に次ぐ、故に海軍航海業なし。土俗は多くメヂアに習ひ、言語はペルシア語・夷語・ユダヤ語の雜糅なり、而もアラマイク語行はれ、王室はギリシア語を用ふ。社會はペルシア時代と甚異ならず、マゴイ依然として勢力を有し、醫術・記錄・宿曜道を主る。アウグスツスの時、アルサケスの正統衰へ、王室庶流に移り、內訌絕えず、マルクス・アウレリウス以後、メソポタミアを失ふ。二二六年ペルシア人ササンの

パルチア亡ぶ

子アルタフシル、アッシリア兵を率ゐて叛き、王アルタバノス五世を三戰に破る、王之に死し、宗廟・紀錄、兵燹に罹り、國史爲に闕佚す、パルチア亡ぶ。パルチア國を保つ、四百七十六年二十八代に傳ふ。

新ペルシア

第二節 アルタフシル國南に起り、國號を建てゝペルシアといひ、イスタフルに都す、之をサッサン朝の太祖とす。制度は概パルチアの舊に依り、國旗亦パルチアの龍章を襲用す、唯、國語フズワレシを公語とし、ザラツストラ教を國教と定めたるを新儀となすのみ。二四一年死し、子シャープール立つ、父の遺志を繼ぎ、舊ペルシアの版圖を恢復するに意あり。是を以て、父子屢、ローマと交戰し、互に勝敗あり、ローマ之を恐るゝ猶パルチアの盛時のごとし、而も終に志を遂ぐる能はず、二七

二年死す。

アウレリアヌス

第三節 ローマは、マルクス アウレリウス死して後、十九代九十年、帝皆人に非ず。二七〇年アウレリアヌス立つ、年六十四、微賤より起り武略あり。

ローマ城

二七二年ローマ城を築き、北夷に備ふ、城壁長さ六萬二千百六十二尺、幅六十二尺七寸、十四區の境界線に置く、今觀る所のローマ城是なり、ローマ都が今に儼存するは、帝の城壁の力與りて多きに居る。

パルミラ

シリアの東部にパルミラあり、ペルシア・ローマ兩國の間に介在し、東方貿易の要衝に當り、頗る殷富なり。是時、オデナッス、パルミラに君たり、夫人ゼノビア勇武なり、シリアを平げ、エジプトを劫す。帝乃親征してパルミラを滅ぼし、ゼノビアを虜にす、天下復定まる、國民尊號を上りて、レスチツトール オルビスといふ、中興主

プロブス

の義なり。二七五年ペルシア征討の途に弑せらる。プロブス立つ、ゲルマニの諸部を懲らし、リメス・ローマ城を完成して國防を固くし、暇あれば葡萄園を拓き、沼澤を浚へ、孔道を開く、軍民之に苦み、二八二年亦帝を弑す、壽五十一、帝死してローマ復振はず。

行政區

第四節　二八四年ヂオクレチアヌス立つ、夷種國境に逼り、國都にありて全帝國を駕御すべからざるを察し、始めて行政區の制を行ふ、ローマ都稍衰ふ。三〇五年帝、政に倦み位を辭す。是に於て、騷亂相續ぐ十八年、コンスタンチヌス立つ。國都の西に偏し、東方を經營するに便ならざるを理とし、三三六年都をビザンチオンに遷し、帝の名を取りて、コンスタンチノポリスと稱す、今訛りてコンスタンチノプルといふ。是に於て、天下

コンスタンチノプル

を東方・イリクム・イタリア・西方の四區に分ち、文武の官職を別ち、宮中の職員を設け、大に東洋風に潤色す、東ローマの文化是に起る。帝又國民のキリスト教を奉ずるもの多きを視て、之を公許し、ローマの僧正にラテラヌス離宮を賜ふ。最古の本山サン ジオバンニ イン ラテラノ寺是なり。明年帝死し、六傳して、テオドシウスの時に至り、天下を二分して、其二子に授く、ローマ遂に分れて二國となる、之を東ローマ・西ローマといふ。西ローマは五世紀の初より、既に獨立國の實なし。四七六年ゲルマニのオドワケル、第六十代の帝を廢し、自立してイタリア王となり、ローマの國號絶ゆ。

キリスト教最古の本山

東ローマ西ローマ

ローマ立國の制

第五節　ローマは元と一村一國の制より起り、大國となるも猶都市聯合の姿を存す。帝國は數千の都市より成り、各市

各領土を有す。市民は領土に田園を所有して、都市に居住し、富裕の公民は、公吏を互選して、自治の任に當り、貧困の公民は、無料の穀物を受けて衣食す。ケーザルの時、國都の貧民三十二萬に上る。隨ひて移植すれば隨ひて叢生し、穀物を徒食すること甚し。アウグスッス乃エジプトを直轄して、國都の穀倉となし、以て遊民を養ふ。又イタリアを以て、帝國の本部となし、國税を蠲き、隸州の租税を以て國都を粧飾す。歷代皆之に傚ふ。是を以て、國都肥えて隸州瘠せ、イタリア逸して諸國勞す。四世紀以降、隸州力竭きて、イタリア自ら活くる能はず、國民の敵愾心銷亡して、徒、戍をゲルマニ出身の武人に仰ぐ。ローマ頽れて數多の小共和國起り、公民共政の制廢れて、君臣相憑の俗生じ、公德地を掃ひて、宗教獨盛なるは自然の數

なり。

第二篇

第十五章　ゲルマニの遷徙

ゲルマニ

第一節　太古の世、ケルチ、ライン河以東の地に居り、後西に移る。ゲルマニ、スカンヂナヴィアより南下して之に代はり、ゴート部は、東プロシアに、ブルグンド部は、西プロシア・ポメラニアに、ランゴバルド部は、エルベ河下流の左岸にあり。四世紀に至り、ゴートは、ポーランドに入り、ブルグンドは、マイン河に徙り、ランゴバルド又漸くエルベ河に沿ひて溯る。

フン

三七五年出身不詳のフン族、カスピ海の北を繞りて、ロシア南部に入り、ゴートを伐つ。ゴート敗れ、東ゴートの遺民は、オーストリアに走り、

キリスト教國教となる

西ゴートは、ダキアに脱れ、允されてドナウ河南に徙る。邊帥之を待つ酷なり、遂に怒りて叛く、テオドシウス之を平げ、トラキア・モエシアに地を與へて、兵役に服せしめ、之を用ひて天下を取り、キリスト教を國教と定む。

スチリコ

第二節　三九五年、テオドシウス死し、ワンダル部出身のスチリコ、西ローマの長城たり。會、東ローマ帝ゴートに歳給を賜はらず、ゴート王アラリック怒りて叛き、ギリシアを焚掠す、スチリコ之を討つ、アラリック殆免れず。東ローマ帝スチリコを忌み、アラリックをイリクムの將軍に拜す、乃轉じてイタリアを侵す、スチリコ撃ちて之を卻く。四〇八年スチリコ、アラリックと和し、東ローマを圖らんとす。西ローマ帝讒を信じて、スチリコを殺し、條約を批准せず、アラリック乃ローマを圍む、都人黄金

ローマ始めて圍まる

五千斤、銀三萬斤を贈り、ゲルマニ出身の奴隷を放つ、塗金の銅像爲に空し。アラリック、ラウェンナに進み、帝に迫る、復允さず。四一〇年ローマを陷れて劫掠す。是年死し、アタウルフ嗣ぎ、和成る、之をゴート戰役といふ。

ゴート戰役

第三節　四〇五年ブルグンド・ワンダル・スウェビ・アランの四部、衆二十萬、フンに壓せられ、北イタリアに下り、フィレンツェに至る。明年スチリコ之を破り、其將帥を斬る、餘衆潰えて北走し、ゲルマニア・ガリア・イスパニアを焚掠す。是に於て、ブルグンドは、ライン河上流地に據りて、ウォルムスに都し、後漸くラインを溯り、ローヌ河を下りて、疆域を拓き、都をジッネーブ・リヨンに遷し、國語を棄て、ローマ法を用ひて、ブルグンド國を起す。ワンダル・スウェビ・アランは、ピレネー山を度りて南す、ワン

ブルグンド

ワンダル

ガイゼリク

西ゴート

エウリク法典

ダルは、國南の鑛山地方に據る、是を以て、是の地をワンダリキアと名く、今訛りてアンダルシアといふ。四二九年ワンダル王ガイゼリク大擧してアフリカに渡り、トリポリ以西の沿海地を平げ、バレアル諸島シチリアの一部を取りて、海賊國を建て、カルタゴに都す、五三四年亡ぶ。又スウェビは、イスパニア北西隅のガリシアに、アランは、ポルトガルに入る、後皆亡ぶ。是より先き、西ゴート王アタウルフ、西ローマ帝の妹を娶り、帝の爲に、南フランス及イスパニアの北東部を取る。死し、ワリア嗣ぎ、功を以て、アクイタニアを食む。四傳して、四六六年エウリク嗣ぐ、疆域を拓きて、東マルセイユを收め、西イベリア半島を四分して其三を保ち、ツールーズに都す、蓋西ゴート極盛の期とす、四八三年死す。其法典は、西ゴート最古のものにして、實に

アチラ

東ゴート

フランク法典の先驅たり。

第四節　フンは、爾來ホンガリアに居住す。四三三年アチラ之に王たり、匈奴單于の裔と稱す。身短く、頭大く、宏量にして器略あり。四隣の諸部を統合し、ボルガ・ドナウ兩河間の地を領す。東ローマ帝黃金三百五十斤の歲幣を納れ、將軍に拜して其入寇を防ぐ。西ローマ帝屈せず、アチラ大に怒り、兵七十萬を擧げて西し、フランスを蹂躪せんとす。四五一年ローマ軍と、シァロンのカタラウヌム原に戰ひて敗績し、オーストリアに退く。明年北イタリアを侵し、陣中に死す、衆乃潰え、フン僅にクリム半島に保つ。

第五節　オドワケル、イタリアに王たる十三年、疆域を東方に拓く。フン滅亡の後、東ゴート、オーストリアに據る。四八九年東

ゴート王テオドリク國民を率ゐて南下す、オドワケル、ラウェンナに保つ三年、終に降り、殺さる。テオドリク、ラウェンナとベロナとに都す、疆域東ボスニアのドリナ川、西ローヌ河に至り、南シチリア島を幷せ、北ドナウ河を境とす。軍事は部民之に當り、政刑はローマの舊に依る、位に在る三十三年、學藝・實業復起る、イタリア大に治まる。五二六年死し、孫嗣ぐ、幼なり、女アマラスンタ制を稱す。五三六年東ローマ帝將軍ベリサリウスをしてイタリアを伐たしむ、ローマ・ラウェンナ陷る。五四五年ナルセス之に代はり、終に東ゴートを滅ぼす、東ゴート國を有つ六十二年にして亡ぶ。

フランク

第六節　フランクは三世紀の末、ライン河流域に著はる。ストラスブルグ・ケルンの間に居るものをリプアリ部、ベルギー東

サリフランク

フロドウィヒ

サリ法典

邊に居るものをハマウィ部、オランダのゼーラントに居るものをサリ部といふ、皆遊牧・農業に從ふ、サリ部最顯る。其王室の祖をメロウェヒと定め、海神の子と稱す。四世紀の半より、ベルギーに南下し、四四五年北フランスのソム川に至る地を取り、ツルネーに都す。四八一年ヒルデリヒ一世死し、子フロドウィヒ立つ。四八六年西ローマの遺將シアグリウスを殺し、ロアール河を南境となし、西ゴートと接壤す。乃都をパリーに遷し、五〇〇年頃、西ゴート王エウリクの法典を參酌して、サリ法典を布く、實にフランク帝國の國法たり。後西ゴートを伐ちて、アクイタニアを取り、リプアリ部の王を殺して之を幷す、五一一年死す。フロドウィヒ勇猛にして姦黠なり、詐謀を以てフランク王國を建つ、時人國をフランチアと呼ぶ、今訛りてフラン

メロウィンガ朝

スと云ふ。又王統を、メロウィンガといふ、メロウェヒの苗裔の義なり。國を行政區に分ち、諸子を分封す、皆王と稱す、是を以て兄弟相鬩ぎ、内訌絶えず、相傳ふる四世、ダゴベルト一世に至り、王室漸く衰へ、マヨルドムスの權漸く重し、マヨルドムスは宮内長官の義なり。

イギリス

第七節　ブリタニアは、五世紀の大亂に當り、ローマの戍兵を亡ふ。スコットランドのスコット・ピクト之に乘じ、屢イングランドの北邊を掠む。北ドイツのアングル・サクス等又南邊に寇す。國人已を得ず、ゲルマニを招きて自ら禦ぐ。四四九年アングル・サクス・ユート・フリース四部のもの之に應じて來り、スコット・ピクトを懲らす。アングル・サクス二部のもの多數なり、故に統稱してアングロサクソンといふ。アングロサクソン遂に止まりて

アングロサクソン

去らず、國人をコーンウォール・ウェールスの僻陬に逐ひ、七國を建つ、ケント最舊く、ウセックス最顯る。ウェセックスの國祖を、チェルヂクといふ、天神ウォーダンの裔と稱す。八二七年ウェセックス主エグベルト六國を并せて、アングルランドを建つ、今訛りてイングランドといふ。八三六年死し、五傳して八七一年孫アルフレド立つ、賢明なり、父老を徵して立法院を剏め、國郡の制を建つ、國に年寄・長吏を置く、年寄は長官にして、長吏は執務長なり、郡は徵兵區なり、國郡皆裁判會を有し、良民其會員たり。王又學を好む、國法・國歌を集め、外國の書籍を國文に譯し、學校を起し、寺院を建てて、大に文教を布く、九〇一年死す、後人其文績を頌して大王といふ。

エグベルト

アルフレド

第十六章　東ローマ　ペルシア　スラブ

ユスチニアヌス

第一節　東ローマは、治まらざること甚し、上に奄人婢妾跋扈し、下にプレトリア兵、權を擅にし、宗教の論爭、戰車の競戲、濫に行はれ、綱紀頽廢して、朋黨相鬪ふ。五一八年ユスチヌス一世立つ、原とブルガリアの野人なり、武功に依りて將軍たり、プレトリア兵に推されて立つ、善く宰輔に任じ、治績あり。五二七年死し、養子姪立つ、蕃名ウプラウダを義譯して、ユスチニアヌスと改む。俊才にして猜忌なり、庶政を廓清し、宰輔トリボニアヌスを委員長となして、法典を編ましむ、委員等乃歷代の勅令數千卷の法律書に散見する法令を整理し、學說を網羅し附するに通論を以てす。ユスチニアヌス法典・法學

ベリサリウス

ナルセス

綱要・法學通論是なり、業四年にして成る、五三三年之を分布す、雜駁の國法大に簡明となる。帝又蠻夷に陷りたる隸州を復するに意あり、是年、將軍ベリサリウスを遣りて、ワンダル國を伐ち、明年之を滅ぼす、アフリカ復隸州となり、地中海の海賊息む。五三五年又ベリサリウスを起して、東ゴートを伐つ、ベリサリウス先づシチリア島を取り、南イタリアを定め、ローマに入る。五三九年ラウェンナ陷り、イタリア平ぐ、ベリサリウスの威名朝廷を凌ぐ。明年帝ベリサリウスを召還す、東ゴート復興る。五五二年帝奄人ナルセスを拜して將軍となし、復東ゴートを伐つ、國民之を愧づ。ナルセス矮小にして羸弱なり、少より婦人の業に從ひ、嘗て軍事・政務に習はず、而も、奇才にして深慮あり、帝甚之を重んず、是に於て、是命あり。東ゴート王

イタリア定まる

トチラ、東ローマ軍をタジナに逆撃して敗死し、ローマ復陷る。五五三年東ゴート王テヤス、ベスビオ山下に戰死し、其弟キメを嬰守する一年、又降る、イタリア終に平ぎ、東ローマの隷州となる。東ゴート戰役二十年に亘り、東ローマの國力殆竭き、イタリアの富源亦涸れ、

ローマの舊家絶ゆ

ローマの舊家概絶ゆ。

將軍職

帝ナルセスをエクスアルコスとなし、ラウェンナに據りてイタリアを鎭護せしむ、將軍なり。ラウェンナは、原とローマのアドリア海鎭守府なり、軍港深く防備整ひ、東ローマとの連絡最便なり。

養蠶の傳來

第二節　ユスチニアヌス養蠶の方を傳へんと欲すること久し、五五〇年頃二僧インドより歸る、蠶卵を齎し飼養方を傳ふ、乃命じてギリシアに飼養せしむ、之を養蠶の嚆矢とす。帝晩年、政を怠たる甚し、國民其速に死せんことを欲す、帝子な

し、諸姪僉立たんと欲す。五六五年帝死す、壽八十四、姪ユスチヌス二世立つ。是時ナルセス、イタリアに將軍たる十餘年、財を貪り聚斂を恣にす、國人堪ふる能はず、帝に訴ふ、乃ナルセスを免す、ナルセス還らず、ローマに死す。

ランゴバルド

是より先き、ランゴバルド部オーストリアに居り、ホンガリアの地を幷す、アルボインこれに王たり、イタリアに下らんと欲す、東ローマの情報を獲て、五六八年イタリアに入り、ポー河盆地に國を建て、パビアに都す、

ロンバルヂア

之をロンバルヂアといふ。ローマの文物を學び、殊に法學に造詣したるを以て名あり、國を保つ二百三年二十二代に傳ふ。

ペルシア

第三節　ペルシアは、アルタフシルの裔相繼ぐ十八代、五世紀末に至り、漸く振はず、

エフタル

エフタル・トランスオクシアナ・アフガニス

カワド一世

ホスロー一世

ペルシアの文學

タンを奄有し、アラン・カフカズ山を越えて入寇し、復衡を東ローマと爭ふ能はず。四八八年アルタフシル十一世の孫、十九代の王、カワド一世立つ、剛毅なり。五〇二年兵をメソポタミアに出だし、連戰する五年、ヂアルベクルを取る、東ローマ、ダラに城きて、ペルシアに備ふ。五三一年死し、子ホスロー一世立つ、雄才あり、マニ教を禁じ、マズダクの異端を滅ぼして、國教を維持し、カフカズ山城を築きて、デルベント・カズベク・ガグリの三關を固め、國史を纂修せしめて、アルタフシルの事蹟を錄す、ペルシアの文學是に起る。王トルコのハハン、ヂザブルと同盟して、エフタルを伐つ二度、遂に之を亡ぼし、アフガニスタン、インドス河流域を復す。トルコ乃トランスオクシアナに據る。五四〇年ホスロー、シリアに寇し、アンチオキアを陷る。

コルキス

イエメン

アデン

ホスロー二世

明年ベリサリウス、エウフラト河に營す、ホスロー退く。五四二年王コルキスを降だす、東ローマ之を爭ひ、戰ふこと七年、五五六年に至り、王終にコルキスを棄つ。五七二年王イエメンを取り、アデン港に據る、アラビアの香類產地始めてペルシアに歸す、五七九年死す、國人追慕してアノーシャルワーンといふ、不死精靈の義なり。子ホルミズド四世立つ、不肖なり、五九〇年國人之を廢し、子ホスロー二世を立つ。東ローマ帝マウリキウス亦擁立の功あり、王之を德とし、堅く友誼を守る。六〇二年帝害に遘ふ、明年王、帝の讐を報ゆるを名とし、大擧して東ローマを伐つ、向ふ所披靡す、シリア・パレスチナ・小アジア・エジプト・キレネ・ロードス島盡く定まる。是に於て、ペルシアの西境ダリオスの舊時に復し、アルタフシルの志始めて成る、東ロ

ーマ帝ヘラクリウス徒に哀をペルシアに乞ふこと十二年、歳幣を納れて纔に國都を保つ。六二二年帝海軍を用ひて、キリキアに上陸し、兵をイッスに集めて、ペルシアを伐つ、是より帝師を出だすこと連年、六二七年ニヌアに鏖戰す、ペルシア軍潰え、ホスロー奔竄す、國人戰役に堪ふる能はず、明年之を廢す、長子シェロエ、父及諸弟を殺して自立し、帝と和す、ペルシア遂に衰ふ。

スラブ

第四節 六世紀に至り、スラブ族又東ローマの北境に現る、スラブは、東ウラル山より、西オーデル河に至る平原に居住する大族なり。其地廣漠にして大河多く、北に森林、南に草野の二帶あり、森にカバ・マツ・オークガシハの三帶あり、野獸に富む。草野は肥沃なり、蝗害を以て聞ゆ。住民は農業に從ひ、一

村一國を成す、之をスロボダといふ、自由の義なり。各村皆一定の疆域を有し、必ず水邊若くは森中にあり、村内に神森あり、政教の事を此に執る要塞あり、難あれば此に保つ、忌場あり、此に牲を殺し、罪人を刑し、死屍を焚く、各村土地を共有し、一定の麥畝・菜園を個人に頒つ、個人は、唯家畜・農具を私有するのみ、村内の政教は、父老之を掌り、公衆は與らず。宗教は、雷神を主神とし、黑・白の二神あり、河伯亦崇めらる。スラブ族の中、レヒ・チェヒ先づ現はれ、ロス・ブルガル次ぎて起つ、

ポーランド

レヒはワルタ川流域に據りて、所謂ポーランドを建て、

ボヘミア

チェヒはマルコマンニ・クアヂの遺地に移りて、ボヘミアを剏む、今のドイツ東半の地は、實にスラブの國なり。

ロシア

八八八年マジァール部、ウラル山を發し、フィン族を幷せて南下し、ロシア南部を擾す、

ブルガリア

國人ゲルマニのルーリク兄弟を迎へて國を起す、ロス是なり。ロスは外國人の義、ルーリク部下の謂なり。ブルガルは、原と、ボルガの支流、カマ河流域に居り、スラブ・フィン・トルコの雜種なり、大國を成す、後其一部徙りて、東ローマ北境に至る。五五九年冬甚寒く、ドナウ河堅く凍る、ザベルガン、ブルガルを率ゐて南侵し、國都を距る七里の地に營す。ユスチニアヌス大に怖れ、老將ベリサリウスを起して、國都を防がしむ、都人士其將軍たるを聞き、僉振ひて起つ、ブルガル敗れて退く。帝ベリサリウスを忌み、其兵權を解く、五六五年死す、帝其產を沒す、史家ベリサリウスを推して、東ローマ第一の忠臣となす。

第十七章　サラセン

第一節

アラビア

アラビアは、イエメン・ヘヂァズ・ネヂドの三部より成る。イエメンは、インド洋に面する高地、香類を產し、アデン港を控ゆ、古へサバ部此に居り、インド貨物を取扱ひ、香類を輸出し、農商の業頗盛なり。ヘヂァズは、紅海に臨む山地、物產なし、住民シリア・イエメンの間を往還し、專運送業を主る。ネヂドは、シリア東南の內地、廣漠なる砂磧にして、遊牧の諸部此に居り、馬・駱駝の良種を出だす。シリア人、部民を統稱して、サラケニと呼ぶ、今訛りてサラセンと云ふ、沙漠住民の意なり。アラビア人沈毅にして豪邁なり、戰陣に勇に、貨殖に敏く、詩歌を好み、信仰に篤し。

メッカ　メジナ

ヘヂァズに、メッカ・メヂナの二市あり、メッカに神社あり、カーバといふ、黑石を神體となす、實に國人崇敬の燒點たり。

クッサイ

五世紀の初、クッサイなるものあり、コレイシ部を起し

ムハメッド

て、カーバの神職となる、神職は社務を掌り、食品・清水を參拜者に給し、メッカ市參事會に議長となり、市內取引貨物の價格十分の一を征して、社費に充つ、其職權、政務總裁に當る、故にシリア人神職を呼びて、メッカの領主といふ、クッサイの裔、相承けて、カーバの神職たり。五七〇年頃、六世の孫ムハメッド生る、ムハメッド幼にして孤、神經質にして頭過大なり、長じて布類を取引す。是より先き、ペルシア、ヒラの領主をして、ペルシア領アラビアの臣民を管轄せしむ。六〇九年ヒラの領主叛き、ペルシア兵に克つ、是に於て、ムハメッド新教を立てて、國人を統一し、以てペルシアを伐つ志を起し、ユダヤ教を參酌し、先輩の考說を總合して、アルコーランを編み、之を神の制法と稱して、一神教を唱ふ、部衆信ぜず、六二二年メヂナに走

ヘヂラ紀元

イスラム教

ハリファ

る、之をヘヂラ紀元元年とす、ヘヂラは別離の意、ムハメッドのメッカを去るを指す。既にして信者漸く多し、乃兵力を以て教法を弘通し、先づメッカを取りて、カーバに入り、諸神像を毀つ、ムハメッドの教法、遂にアラビアに行はる、イスラム教是なり。

第二節　六三二年ムハメッド死す、父老其舅アブベクルを擧げて法統を承けしむ、之をハリファといふ、繼承者の義なり。二年にして死し、オーマルに傳ふ、オーマル器略あり、ムハメッド甚これを重んず、こゝに於て繼ぎ、自エミル・アル・ムメニンと號し、政・教の兩權を統べて、教旨を補修し、大に四方を征す。而して自奉ずること甚薄く、冷水を飲み、大麥パンを食ひ、襤褸を著て乞食と伍す、エミル・アル・ムメニンは信者の君の

三代
バスラ港
ペルシア亡ぶ

義なり。六四四年死し、ムハメドの祐筆オスマン嗣ぐ、六五六年國人に弑せらる、之をイスラム教初期三代のハリファとなす。ムハメッド既に東ローマ帝ヘラクリウスとシリアを爭ふ、アブベクル師を東西に出だし、ペルシア・シリアを伐つ、漸く隣國を蠶食す。オーマルの時、アシリアを取り、貿易港バスラを置き、パレスチナ・シリアを平げ、エジプトを降だして、フィラデルフォスの圖書館を焚き、更に西してトリポリ・アフリカを侵す。オスマン業を繼ぎ、ペルシア・アフリカを征す、ホラサン・バクトリア陷る。六五一年ホスロー二世の孫、イズデゲルド三世死し、子ペロズ唐に走る、ペルシア亡ぶ、トリポリ・アフリカ又定まる。ムハメッド死してより二十年にして、サラセン帝國成る。諸將ハレド・アムル最顯る。

ムアウィヤ
オンマヤ朝
火炮

第三節　是より先き、オーマル、ムアウィヤをシリアの總督に任ず。オスマン弑せられ、アリ衆に推されて立つ、ムアウィヤ故ハリファの讎に報ゆるを名として兵を擧ぐ。六六一年盜アリを殺す、アリは、ムハメッドの女ファチマの生む所、實に嫡孫たり。後のエジプトのファチマ朝、ペルシアのソフィ朝等、皆其裔と稱す。是に於て、ムアウィヤ代りてハリファとなり、國都をメヂナよりシリアのダマスクに遷す、之をオンマヤ朝の始祖とす。三代の業を紹ぐ志あり、六六八年コンスタンチノプルを圍み、攻城七年に亘る、城兵石脂製の火炮を用ひて敵を苦む、遂に取る能はず、歲幣を納れて和す。七〇五年ワリド立つ、復大に兵を用ふ。明年將軍カチバをして、東方を征せしむ。七一二年フワリズム・ブハラ・サマルカンド盡く定まり、サラセン帝國唐

と接壞す。

タリク

第四節　七〇八年ワリド、將軍ムサをエジプト總督に任じ、アフリカ北海岸地を鎭撫せしむ。後二年、ムサ、サルヂニア・コルシカ・バレアル諸島を取り、イスパニアを偵ふ。七一一年ムサ、部將タリクに兵五千を與へて、イスパニアを侵さしむ、タリク乃國南の嶮崖に據る、後人之を紀し、其地をヂェバル　アル、タリクと呼ぶ、タリク山の意なり、今訛りてジブラルタルといふ。是時、西ゴート王ロデリゴ第三十四代の君として、イスパニアに臨む、部民國語を忘れ、武技を怠ること既に百年、復古への ゴートに非ず。王タリクの入寇を聞き、大擧之をヘレスに撃ちて敗績し、奔竄して溺死す。タリク直に國都トレドを指して進む、國都降る、國北の諸地、概平ぐ。タリク、ヘレスに克ちて

西ゴート亡ぶ

より、是に至る僅に數月、西ゴート國を有つ三百年にして亡ぶ。乃仁を以て降民を撫て、義を以てキリスト僧侶を待つ、國人之に安んず。サラセン後ピレネー山を度り、ラングドックに入り、益、北に進み、七三二年ロアール河に逼る、フランク王國のマヨルドムス、カロロ、之をツール・ポアチエーの間に撃ち、大に之を破る。爾來サラセン復ロアール河北を候はず、カロロは、マルテル即槌の稱を得、サラセンは、ヨーロッパ人を汎稱してフランクといふ。

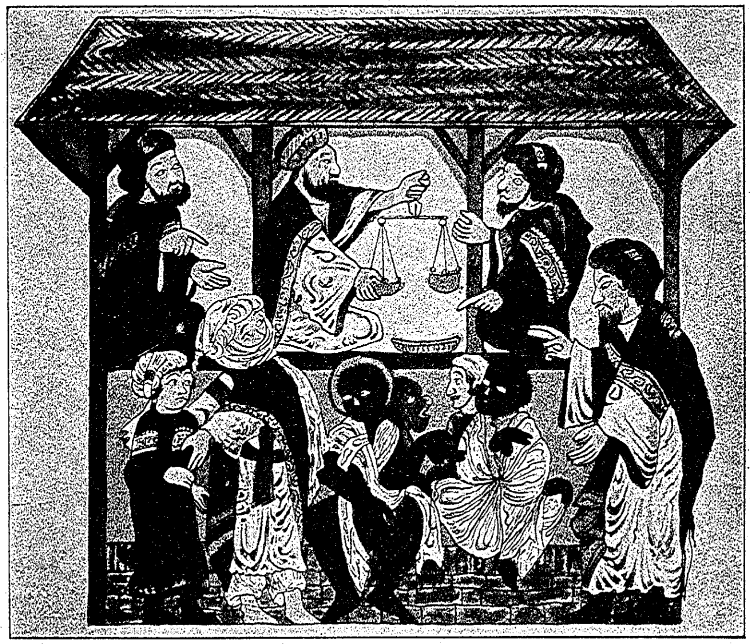
サラセンの三派

第五節　七四五年オンマヤ朝第十四代のハリファ　マルワン立つ。是時に方り、サラセン帝國の疆域、東葱嶺より、西大西洋に至り、實に世界の大半を有つ、而して德望の世を蓋ふものなく、雄才の諸部を鎭むるに足るものなし。是に於て、天下三派

サラセン海舶

アッバス朝
アル マンスル
バグダード
アル ラシッド
アル マムン

に分れ、オンマヤ朝を奉ずるものは、白色を尙びてシリアに據り。ファチマ派を信ずるものは、綠色を尙びてペルシアに潛み、アッバス派を擁するものは、黑色を尙びてホラサンに起る。七五〇年アッバス派ムハメッドの叔父アッバス五世の孫アブルアッバスを擁立し、マルワンを破る、マルワン、エジプトに走り殺さる。アブル アッバス乃ハリファとなる、之をアッバス朝の始祖となす。是に於て、先朝の陵墓を發きて遺骨を捨て、大に諸白衣を誅夷す。七五四年死し、庶兄アル マンスル立つ、賢明にして學を好む。七六二年國都をチグリス河上に建てて、バグダードと稱す、星學此に起る。七七四年死す。七八六年孫第五代アルラシッド立つ、文學大に起る。八〇七年死す。八一三年第二子第七代アル マムン立つ、曾祖父の志を紹ぎ、諸科學を奬め、ギ



サラセン商の取引場

リシア諸大家の遺書を探り、之を國文に譯せしむ、星學・數學・醫學・地理學蔚然として起る、史學亦萌す、八三三年死す、建都以後七十年をサラセン帝國極盛の期とす。是時帝國、世界の貿易を壟斷す、北ロシアのアテル河より、南アフリカのザンジバルより、西イフリキヤより、東インド・シナ・マライ諸島より、世界の貨物バグダードに聚り、サラセン商舶、地中海・カスピ海・インド洋・シナ海に浮び、商賈の世界に散居するもの其數を知らず、唐、廣府市舶司の收税を以て重き財源となすに至る、是を以て、バグダード學術の中心、商工業の焼點となる。

第六節　アル マムン死して、アッバス朝漸く衰へ、ハリファ復人に非ず。宿衛のトルコ將士漸く跋扈し、トランスオクシアナのトルコ諸部、漸く勃亂なり。八六八年セイスタンの流賊、ヤコブ

ペルシアの諸朝

イブンレース、ソファル朝を起す、ペルシアに入り、ハリファを劫す、八七七年死す、サマン朝之に代はる、ヂレム朝又西部に起る。

ガズニ朝

後百二十二年、ガズニ主マームード立つ、ペルシアを定め、インドを征す、碩學ビルニ從ふ、是に於て、イスラム教始めてインドに傳はり、インドの星學・數學、アラビアに入る。詩人フィルダウシ又王命に依り、六萬句の長篇を咏じて、ペルシア國史を述ぶ、今傳はるペルシア編纂の最古の正史是なり、一〇三〇年死す。

セルジャク朝

是より先き、トルコのセルジック、トランスオクシアナに起り、イスラム教を奉ず。一〇三八年孫トグルルベク嗣ぐ、四隣を征してペルシアに王たり、之をセルジック朝の始祖とす。一〇五五年バグダードを淸め、ハリフより東西王の尊號を受く。此年スルタンの號漸く行はれ、トグルルベク亦之を

用ふ、皇帝の義なり。是に於て、ハリファ政權を失ひ、僅に教權を保つ。

コルドバハリファ

第七節　白衣派の誅夷せらるるに當り、オンマヤ朝の族アブデルラーマン、イスパニアに走る、七五五年國人之を奉じ、コルドバに都す、アッバス朝之を伐つ、克つ能はず。アバス朝衰へてより、マウリタニアのエドリス朝、エジプト・イフリキヤのファチマ朝、マウリタニア・イスパニアのムラビット朝交起り、九世紀より十二世紀に至る、エジプト最盛なり。皆イスパニアに倣ひて、バグダードの朝命に遵はず、アバス朝と文物の紹隆を競ひて、學藝を好む。カイロの圖書館は、十萬卷を藏し、イスパニアのオンマヤ朝は、六十萬卷を集め、三百餘の著述家を出だし、アンダルシアの一國、尙七十餘の公開圖書館を有す。而し

カンヂア

シチリア

てイスパニアのサラセン、敢爲の風を墜さず。八二三年クレテ島に據り、ハンダクに城く、カンヂアの名此に基く。次ぎて、八二七年シチリアのセリノス古墟附近に上陸し、パレルモを取りて政廳を置き、五十年の後、シラクサを平ぐ、シチリア定まる、カミカヤツリ草を培栽し、エジプト專賣の製紙業を、シチリアに起したるは、是時にあり。

第十八章　東ヨーロッパと西ヨーロッパ

カロロ大帝の業

第一節　東ローマは、ヘラクリウス以來、亂れて麻の如し、サラセン東に寇し、スラブ西に據り、アワール・マジァール北より下り、地中海南の隸州は、悉くサラセンに陷り、北イタリアは、ロ

グレゴリオ一世

法皇

ンバルヂアに沒す、ローマの古都猶存すと雖、國家之を護る能はず、ローマの僧正已を得ず、兵を召して自守る、隱然國主の如し。五九〇年グレゴリオ一世僧正となり、始めて是策に出づ、後人其規模を稱して大法皇といふ。七二六年帝レオ肖像崇拜を禁ず、ローマ領イタリア人服せず、僧正グレゴリオ二世、乃、ロンバルヂア王ルイトプランドの後援を恃み、自立してローマ領イタリアの君となる。是に於て、僧正政・教の二權を握り、法皇と稱す、死し、グレゴリオ三世立つ。七四〇年ルイトプランド法皇の譎詐を憤り、ローマを伐たんとす、法皇大に怖れ、盟をフランク王國のカロロマルテルに乞ふ、議未成らず、明年法皇、カロロ共に死す、ザカリア立ちピピン嗣ぐ。

第二節　フランク王國衰ふる既に久し、王は徒、虛器を擁し、

カロリンガ朝

カロロ大帝

成をマヨル、ドムスに仰ぐ、マヨル、ドムス、カロロ嚮きにサラセンを撃退す、威望王室を壓す、死す、子ピピン嗣ぐ、七五二年メロウィンガ朝の禪を受く、法皇ザカリア之を祝す、之をカロリンガ朝の始祖とす。是年、法皇ステフノ三世立つ、ロンバルヂア王アイスツルフ、イタリアを一統せんとす、法皇急を告ぐ、乃請に應じ、イタリアに入る二度、アイスツルフをして、侵地を法皇に還さしむ。七六八年死し、子カロロ立つ、篤學にして大略あり、ドイツを定め、ピレネー山南を取り、ロンバルヂアを滅ぼし、アワールを却け、スラブを懲らす、ゲルマニ概一統に歸す。八〇〇年法皇レオ三世より帝冠を受け、インペラトール ローマノルムと號す、ローマ人の帝の謂なり。是に於て、東西復ローマ帝あり、フランク帝國是に起る、疆域東ラーブ・エルベの兩河より、西大西洋に及

帝國の制

び、南エブロ河ローマの南境より、北、北海に達す。

第三節 フランク帝國の制、疆域を國・郡・邊境・要處に分ち、國に國司、郡に郡司、邊境に鎭守將軍、要處に鎭將を置く、國司・郡司は土豪之に任じ、刑・政を掌り、徵兵を率ゆ、鎭守將軍は、スラブ・アワール・サラセン等の動靜を偵ひ、國境を鎭護す、鎭將は、國內の要處を守り、不虞に備ふ。每歲五月、諸國司等を聚會して、施政の綱領を授け、勅令を布く、國都なし、諸國に行在所を置き、所司を任ず、帝常に巡狩して、親ら控訴を裁し、帝在らざれば、所司之を聽く、又按察使を補して、國司の非違を檢し、人民の直訴を斷ぜしむ、法律は舊に依りて、サリ法典を國法とし、別にリプアリ・アレマン・バユワル・ブルグンド・ランゴバルド・サクス・チューリンガ・フリース・西ゴート等諸部の習慣法を定め、民刑の事、部

イタリア

の法に據りて決す、社會は、良・賤の二色より成り、良民は、裁判に預り、兵役・賦役を勤め、驛傳・宿舍を供し、軍馬・軍器を蓄ふ、是を以て、國民の義務重きに過ぎて、良民漸く減じ、土豪權を世にして、土地の兼幷盛に行はれ、諸寺・豪族、貧者を使ひて、墾田を起し、貧者は、諸寺・豪族に憑りて賦課を免る、領主・郎從の關係漸く生ず。

第四節　教育

カロロ學を好む、學校を興して勸學田を寄せ、教官を選任してラテン文學を授けしむ、時々親ら校舍に臨みて、學生の勤惰を檢し、學生を聚めて訓諭す、僧官・書記官皆得業生たり。八一四年死す、壽七十二、國人帝の大業を頌して大帝といふ。然れども帝國の制、獨大帝能く行ふ、常人の敢て能くする所に非るなり。二傳して八四三年帝國分裂して、イタリ

ドイツ
フランス
クロバチア

ア・ロートリンゲン・ドイツ・フランスの三國となる、イタリア・ロートリンゲンは二世、ドイツは四世、フランスは六世にして王統絶え、フランス王統の支流、ドイツに入り、今のヘッセンとなる、九・十世紀の交、カロリンガ朝諸國の邊境甚多事なり。ノルマンのダンは、バルト海西の群島に據りて、デンマルクを起し、レヒは、カルパチア山北の曠野を墾きて、ポーランドの基礎を置き、チェヒは、漸くオーデル・エルベ兩河の水源盆地を固め、マジァールは、アワールを滅ぼし、クロバットを逐ひて、ホンガリアを建て、クロバットは、イリリアに下りて、海賊國を起す、今のクロアチア・スラウォニア・ダルマチアの三國是なり、時人之をクロバチアと呼ぶ、國を有つ百年、ベネチアに亡ぼさる。

ルーリク朝
アメリカの最先發見
ロロ
ノルマンヂー

第十九章　ノルマン

第一節　ノルマンは北人の義、スカンヂナウィア半島西部の住民を指す、資性姦黠にして桀驁なり。其遷徙は、實に北夷圖南の終結を成す、東ロシアに入りて、ルーリク朝を起し、西イスランド・グリーンランド・ラブラドルを探檢して、アメリカ最先發見者の譽を收め、南イングランド・南イタリアを略して國民の大器を示す、其業最イングランドに顯る。是時カロリンガ朝衰へて、列侯フランスに割據す。九一一年ノルマンのロロ、セイヌ下流地に據る、乃國語を棄て、フランスの風俗を採り、列侯となる、時人依りて其國をノルマンヂーといふ。七傳して、六世の孫ウィルレム立つ、豪邁なり。是より先き、スウェン、デンマルクに王たり、

カヌート
ウィルレム一世
ノルマンヂー朝

一〇〇〇年ノルウェーを幷せ、威北地に振ふ、會〻アングロ サクソン、イングランド居住のダン數千人を殺す、スウェン・カヌート父子乃イングランドを伐ちて之を取り、二孫に傳ふ、共に子なし、統絶ゆ。アングロ サクソンのエドワルド復入りて王たり、一〇六六年死す、子なし、ノルマンヂー侯ウィルレム讓與を得たりと稱し、イングランドに入る、アングロ サクソン服せず、ヘースチングスに戰ひて敗れ、ウィルレム王となる、之をノルマンヂー朝の始祖とす。當時フランス現行の制を參酌して、アングロ サクソンの國體を潤色し、イギリス國家の基礎を定む。

第二節　十一世紀の初、フランスのノルマン既に化して、フランス人となる、而も尚祖先の風を失はず、戶口愈〻殖えて、領土愈〻隘く、他鄕に遷徙して富貴を獲んと欲するもの漸く多し。

イタリアのノルマン

アプリア

是時ヨーロッパの俗、好みてパレスチナ・イタリアの靈蹟を巡拜す、ノルマン亦多く孤劒イタリアに遊ぶ、會、アプリアのバリ市、東ローマに叛き、ノルマンを徵して其志を遂げんとす、果さず、敗餘の遺衆流賊となり、カプア附近のアベルサ城を保つ。一〇三八年東ローマ、シチリアを復せんとし、ノルマンを徵す、ノルマン五百騎を以て之に應ず、殊功あり、賞なし、ノルマン之を慍る。一〇四〇年ノルマン、アプリアを侵し、三年にして之を取る、是に於て、共和國を建て、政務總裁兼將軍を置き、アプリア伯と號す。ウィルレム ド オートビール伯たり、ウィルレム諸弟十一人あり、皆才武なり、ウィルレム死し、弟ドロゴ嗣ぐ、盜に殺され、弟オンフレド嗣ぐ。一〇五三年法皇レオ九世、アプリアを伐つ、伯降を乞ふ、許さず、已を得ずして戰ふ、法皇虜となる、法皇乃ノルマ

ロベルト ギスカルド

南イタリアのノルマン國

醫學

アマルフィ

シチリア

ンと同盟し、之にアプリア・カラブリアを授く、オンフレド死し、弟ロベルト嗣ぐ。法皇ニコラ二世、ロベルトを公爵に進め、シチリア以下サラセン占領地を復せしむ、是に於て、南イタリアを平げて、サレルノに醫科大學を置き、バグダードの大醫イブン シナの高弟、コンスタンチンを聘して主任教授となす、醫學此に起る。サレルノの西、嶮崖海に落ち良港を帶ぶ、之をアマルフィとなす、六世紀以降航海・商業を以て鳴り、其船舶は羅針盤を用ひたりといふ、遂に又ノルマンに陷る。一〇六〇年ロベルト、季弟ロジェロをして、シチリアを取らしむ、ロジェロ攻伐する三十年、僅に之を平ぐ、是に於て、サラセンを撫でて大伯と號す、ロベルト樂まず、東ローマを伐ちて自慰めんとす、一〇八一年東ローマを侵し、明年ヅラッォを降だす、ヅラッォは古へのエピダムノス、東ローマ

ルーリク

ギリシア宗

西方の鎖鑰なり、東帝大に怖れ、西帝に賂遺して、ノルマンを牽制せしむ、西帝乃ローマを圍む、ロベルト圍を解き、一〇八四年ギリシアに入り、明年死す、年七十、イングランド王ウィルレム之を聞きて悅ぶ、時人其姦智を稱して、ギスカルドと呼ぶ、是に於て、ロジェロ、後の所謂兩シチリア王國の疆域を一統し、子ロジェロ二世に傳ふ、一一九四年西帝に滅ぼさる、シチリアのノルマン朝五代にして亡ぶ後十年ノルマンヂー亦フランスに沒す。

第三節　九世紀の末、ルーリク二弟と與にロシアを起す、乃南、キエフに都して、コンスタンチノブルを圖る、死し、子イゴル立つ、死し、夫人オルガ制を稱し、ギリシア宗ギリスト敎を奉ず、ブラヂミル一世に至り、國敎となす、是に於て、東ローマの文化、ロシアに入る。其子孫世世領土を割きて濫に行政區を置き、宗室互

アレキサンデル ネブスキイ

イバン バシリエビチ

に鬩ぎて寧歲なし、國君をビェリキイ クニーズと稱す、太公の義なり、十三世紀に至り、モンゴル大擧してロシアに入る、兵衆國土を蔽ふ蝗の如く、其向ふ所摧くる朽木の如し、獨ノブゴロド天險を占めて纔に免る。是時ルーリク十二世の孫アレキサンデル第十六代の太公たり、善くモンゴルに仕へ、僅に國祀を奉ず。一二四一年、スウェーデン軍をネバ川に破り、ネブスキイの稱を得たり。死し、子ダニエル立ち、モスクバに都す、故に時人ロシアをモスコウィアといふ。八傳して一四六二年イバンバシリエビチ立つ、豪邁なり。一四七八年終にノブゴロド共和國を滅ぼして國北の地を幷せ、後二年シルオルダを破り、一四八七年カザンを取り、ギリシア最後の帝コンスタンチヌスの姪を娶り、東ローマの國祀を襲ぐ。乃典範を定めて繼承を

イバンバシリエビチ二世ツァール　コサク　ダスコビチ　イルマク

律し、行政區の制を廢して內訌の因を絕ち、ドイツ・イタリアの職工を用ひて其技術を傳ふ、一五〇五年死す。子バシリイバノビチ立つ、一五三三年死し、子イバンバシリエビチ二世立つ、始めてツァールの尊號を用ひ、一五四五年常備兵を置く。是時コサク、ドニエプル・ボルガ兩河下流とカフカズ山との間に連なる東西三百里の平野に居り、群盜を成す、コサクは輕騎の意、スラブとトルコとの雜種なり、ウクライナに居住するもの最聞ゆ、其ドニエプル下流の河中島に舍營するより夙くザポロギの名あり。一五〇八年ポーランドの邊將ダスコビチ其用ふべきを察し、始めてコサク隊を編みて邊防に充つ、隊長をアトマンといふ、一五四〇年ダスコビチ死し、コサク隊稍散ず、ツァール乃コサクを逐ひて其居住地を取る、一五八〇年イェル

シビル　シベリア　ロマーノフ帝室

マクチモフェイビチ、ボルガコサクに隊長たり、ツァールに討たれてウラル山に奔り、鑛山主ストロガノフに寄る、明年鑛山主、イェルマクを助けてイルチシ河のシビルを伐たしむ、シビル定まり、オスチアク部降る、一五八二年捷を獻ず、ツァール之を嘉し、イェルマクをシビルの總督に任ず、之をシベリア占領の端緒となす、是よりコサク兵疆域拓殖の利器となる。一五八四年死し、子フェオドルイバノビチ立つ、一五九八年死す、子なし、統絕ゆ、妹マリアイバノバ國教管長フェオドルに嫁す、ロマーノフ帝室之より出づ、ルーリク朝君を得る二十八、七百餘年にして亡ぶ。

第二十章　神聖ローマ帝國　法王の威權

第一節　カロリンガ帝統、西帝國に絕えて、神聖ローマ帝國起

ドイツ王

ヘンリ一世

る、舊に依り國號をレグヌム ローマノルムと稱し、帝の尊號インペラトール ローマノルムに、レックス ゲルマニエー即ドイツ王を加へ、以てゲルマニ居住の地を一統して國を建つる國是を表す。九一九年サクソニア侯ヘンリ、フリッツラルにフランコニア・サクソニアの諸豪族に推されて立つ、之を帝ヘンリ一世とす。サクスは北ドイツの雄部、ランゴバルドの族類なり、猶舊習を守り、平村に居住して、城郭を厭ふ。是時スラブはエルベ河の東に居り、勢猖獗なり、ダンはアイデル川を渡りて、エルベ河に逼り、チェヒは、ボヘミア・シレシア・モラウィアを合して強國を建て、マジャールは國境を越えて屢〻寇す。帝乃、マジャールと和して、城郭を築き、エルベ・オーデル兩河間の地を定め、ボヘミアを降し、ダンを逐ひて、シ゚ライ川を北境とす、ドイツ始めて一統に歸す、九三

六年死す、壽六十、子オットー一世立つ。

オットー一世

第二節

オットー一世、雄才にして大略あり、列侯の權を殺ぎて、宗室を封じ、ポーランド・ボヘミアを降し、デンマルクを伐ちて、ユトランドを取り、ブルグンド・フランスに入りて、ブルグンド王フランスのカロリンガ朝を扶植す、弟バワリア侯ヘンリ、カリンチアを清め、マジャールを伐ちて、チサ河に至る、カロリンガ帝統絶えてより、イタリア治まらず、フリウリ・スポレト・プロバンス・イブレアの列侯、交〻王位を爭ひ豪族相鬩ぎて、マジャール東より寇し、サラセン・プロバンスのグリモー灣、南イタリアのガリリアノ川に據りて内地を侵し、テオドラ・マロチア母女、ローマを簒ひて、法皇の權地に墜つ。是に於て、帝イタリアを合はさんと欲す、九五一年アルプ山を度り、イタリア王ベレンガルを降だす、北イタリア

イタリア

アウグスツス
デンマルク

定まる。九六一年復イタリアに入り、明年帝冠をローマに受け、尊號にアウグスツスを加ふ、帝イタリアに留まる六年、法皇の選擧を裁可し、法皇領を管轄し、以て永く恒例と爲さしむ。九六六年帝イタリアに南狩し、ギリシア帝と婚を通じ、倶にサラセンを一掃せんと欲す、九七二年議成り、ギリシア帝、女を太子に配す、帝乃アプリアを棄つ。明年死す、壽五十七、時人帝の偉業を頌して大帝といふ。子オットー二世立つ、ローマに都して、西ローマを復せんと欲す、早死し、子オットー三世立つ、一〇〇二年亦早死して統絶ゆ。

第三節　帝の時、東邊漸く靜謐に歸し、キリスト教漸く弘通す、デンマルクは、國祖ゴルムの子ハラルド位に在り、敗餘復衡をドイツと爭はず。九八一年死し、子スウェン立ち、ノルウェー・イングラ

ポーランド
ボヘミア
ホンガリア
ベネチア

ンドを取る、ポーランドはムスチスラフ、侯たり、帝の晩年屢入朝す。九九九年死す、子ボレスラ立ち、明年王と稱す、ボヘミアは、帝の元年、侯ウェンツェル、王と稱す。マジァールは、九五五年レヒフェルドに敗績して後、復ドイツを候はず、漸く村市に永住し、稼穡の業に就く。一〇〇一年ステファノ始めてホンガリア王と稱す。皆キリスト教に歸依し、文教漸く萠す、ベネチア又漸く興る、ウェネチは、原とイタリア東北のガリ族なり、ランゴバルドの入冠に方り、ラグナの海洲に潛む、沿海のラグナをラグナ モルタといふ、潮の滿干なし、海洲を周るラグナをラグナ ビバといふ、潮滿つれば淺海をなし、干れば干潟となり、纔に一條の水路を通ず、是を以て、海洲天險の海堡を成し、魚鹽の利無盡なり、商業・海軍夙く此に起る。東ローマ將軍之を恃みて、ラウェンナに保

つ、ロンバルヂァ滅亡の後、海洲の戸口益、殖え、獨立の共和國となる。一〇〇〇年頃ダルマチアを幷せて、アドリア海の制海權を握る、其政務總裁をドージェと稱す、東ローマの官ヅックスの轉訛なり。

イシドロ格

グレゴリオ七世

第四節　十一世紀後半にヒルデブランド、法皇の執行たり、カロリンガ朝のルイス一世の時、僧徒等が僞作せる所謂イシドロ格を濫吹して、法皇を世界の眞主と爲し、以て帝王に號令せんとす、是に於て、內僧侶をして戒律を持せしめ、外トスカナ女侯母女ベアトリス・マチルダ、ノルマンのロベルト　ギスカルドと相結び、一〇七三年定制を犯して法皇となる、之をグレゴリオ七世と爲す。帝ヘンリ四世制する能はず、終に法皇に屈す、法皇獨尊し、帝威復振はず、後法皇の威權漸く衰へ、フランス王フィ

アビニォン法皇

リポ四世、法皇ボニファチオ八世を虜にす、法皇愧ぢて死す。一三〇八年クレメンス五世ローマを出でて、アビニォンに遷り、法皇の威權全く衰ふ。

第二十一章　西ヨーロッパの制度及國情

フェオド制

第一節　ゲルマニ西ヨーロッパに雜居してより、所謂フェオド制漸く發展す、ゲルマニはローマの舍營・屯田の制に倣ひ、到る處に、土民より一定の割地を取り、此に居住す、之をフェオドといふ。其社會は、良・賤の二色より成る、良民は公民にして、又兵士たり、是を以て、公民國土に屯田して兵役に從ふ、之をゲルマニ雜居の本色とす、後墾田・世襲田の刱起り、豪族墾田を占む、キリスト教弘通するに至り、諸寺競ひて田園の寄進を勸

レスチーヌ結集　騎兵　セニオル　ワッソス　セコンメンダーレ

化し、七世紀の末、寺領フランスの三分の一に居り、僧官驕傲にして、良民漸く窮す。是に於て、カロロ　マルテルは、一族を豪富の諸寺に住持たらしめて軍事費を辨へ、フランク王ピピンは、七四三年レスチーヌに結集して、寺領の一部を収公し、以てサラセン攻伐の資に充つ、寺領収公遂に恒例となる、王乃収公地を將士に頒ち、軍馬を養はしめて騎兵を起す、ゲルマニに騎兵あるは茲に始まる、兵・民漸く別る、是に於て、フェオド制の基礎成る。

第二節　メロウィンガ朝の制、長上を總てセニオルといふ、カロリンガ朝に至り、豪族皆セニオルとして領内二色の强壯なるものを簡み、其誓詞を徴して監督・保護の責に任ず、之をワッソスといふ、是を以て、セニオルは主人となり、ワッソスは郞從となり、セコンメンダーレの風、蕩蕩として行はる、セコンメンダーレは憑依して保護を仰ぐの意、蓋しゲルマニの舊慣なり、メロウィンガ朝の重臣を、アントルスチオといふも、亦此意のみ、フォド制茲に定まり、君臣或は義に據りて相依り、或は約に由りて相結ぶ、十一世紀以降、西ヨーロッパ諸國の社會、皆是制に依りて立つ。フランス・ドイツは列侯强大にして、勢帝王を淩ぎ、イタリアは列侯・都市勢を均分し、イギリスはウィルレム一世の國是に據り、全國に散在する莊園を賜ふも、國主・列侯を置かざる制を採る等、國に依りて些末の相違あるに過ぎず。是に於て、帝王は列侯を以てワッソスとなし、列侯は家中の將士を以てワッソスとなし、將士は領地の民を以てワッソスとなす、兵・農完く別れ、武門茲に起る。

武門　武士道

第三節　武門起りて武士道亦生ず、ゲルマニの舊習、少年は

甲冑武士

武勳を立て尊長の人より許さるゝにあらざれば、刀を帶ぶるを得ず、フェオド制既に成りて、是俗猶存す、一槍の主人は馬に騎り、見習少年を隨へ數人の若黨を從ふ、之を一槍と稱す、武士は初は良・賤に依りて武裝を異にし、良民出身者は、重甲を擐、賤民出身者は輕裝するの別ありしも、後漸く廢れ、皆九尺柄の長槍を執る、居常神明を崇め、婦人を敬ひ、戰陣に臨みては義勇を勵み奉公を期す、卑怯未練は、其最賤む所にして、仁恕・節義は、其最貴ぶ所なり、是に於て、其鬪ふや先づ名乗り、而して後に槍を交へ、濫に敵を殺さず、名ある武士は之を虜にし、償金を定めて之を放つ、之を要するに、武士道は敬神・崇婦・重仁の三條より成る。

アルプ　アルスラン
マレク　シャー
ルーム

第二十二章　東方諸國　十字軍

第一節　ペルシア王トグルル　ベク、サラセン帝國の實權を握ること九年、一〇六三年死し、姪アルプ　アルスラン立つ、英明にして大度なり、アルメニア・グルジヤを取り、フリギアに入る、ギリシア帝國大に震ふ、一〇七二年トランスオクシアナを征して死す。長子マレク　シャー立つ、器略父に過ぐ、在位二十年、ハリファと相幷びてエミル　アル　ムメニンと號す。先朝の名臣ニザム　ウル　ムルク宰輔たり、族スレイマン、小アジアを定めてルーム國を建て、弟ツクシ、シリア・パレスチナを平ぐ、皆藩屏たり、乃父の業を紹ぎて、トランスオクシアナを經營す、葱嶺以西シベリア以南の地悉く版圖に入る、王、都を奠めず、常に巡狩して領土を按察す、全

パレスチナ

アマルフィ商

版圖を視る十二度に至るといふ、是に於て、天下大に治まり、學術・文學蔚然として興る、一〇九二年バグダードに巡狩し、ハリファを逐ひて、自ら都せんとす、奠都未だ成らずして死す。王死して、版圖ペルシア・ケルマン・シリア・ルームの四國に分れ、セルジック朝復振はず。

第二節　パレスチナ、サラセン帝國に隷する三百三十年、九六九年に至り、エジプトに入る。エジプト商業を重んじ、アマルフィの商賈に特許して、領內に通商せしむ、アマルフィ商乃パレスチナの貿易を壟斷し、イェルサレムに市場を設け、ヨハネ慈惠醫院を建つ、一〇七六年パレスチナ、ペルシアに沒す。イェルサレムにキリストの墓あり、西方諸國より參詣するもの常に相踵ぐ、ペルシア、パレスチナを治むるに方り、キリスト教徒の輻輳するを悅

クレルモン結集

十字軍

ジオフレド ド ブイヨン

ばず、力めて參詣者を抑壓す、西方諸國の人心爲に鼎沸す。是より先き、ギリシア帝ミカエル、ペルシアの威壓を怖れ、法皇グレゴリオ七世に請ひ、西方諸國の入援を得て、ペルシアを擊退せんと欲す、帝ヘンリ四世起つ能はず、一〇九五年ギリシア帝アレクシオス復請ふ、法皇ウルバノ二世、乃クレルモンに結集して、聖墓の保護を勸化す、衆僉振ひて起つ、其赤十字を布片に記し、右肩に附けて合印とせしより、是遠征軍を十字軍といふ。

第三節　一〇九六年第一十字軍成る、戰員四十萬、總督なし、諸將、下ロートリンゲン侯ジオフレド ド ブイヨン、弟バルドウィン、ツールーズ侯ライムンド、タラント領主ボヘムンド等名最顯る、明年コンスタンチノプルに到る、帝アレクシオス、援軍の大にして、ノルマン兵又其中に在るを觀て、意甚安からず、小アジア・シリアを

還すを約して進撃せしむ。一〇九九年イェルサレム陷る、諸將乃議してイェルサレム國を建て、ジオフレドを推して王となす、ジオフレド王號を用ひず、唯「聖墓の別當と稱す、是に於て西方諸國の法制に精しき人士の意見を徵して、イェルサレム法典を定む、王國の制、王は政務・軍事を統裁す、諸士・市民の兩裁判所を設け、王親ら諸士裁判所に長となり、代理をして市民裁判所に長たらしむ、刑事は生命・一肢・名譽に關する件以上、民事は銀一マルク以上の件起りたるとき、對審の後決鬪を命ず、王侯・諸士皆互に權利・義務を法廷に爭ひ、勝敗を武力に訴ふ、フランス語を以て公語と定め、諸國人の歸化を奬む、ベネチア・ジェノバ・ピサ等の商舶諸港に輻湊す。明年死し、弟バルドウィン立ち、王と稱す、死し、姪バルドウィン二世起つ、死し統絶ゆ。一

イェルサレム國

イェルサレム法典

一四六年アレッポ領主ヌールエッヂン、ダマスクを取り、キリスト教徒を劫す、明年フランス王ルイス七世、ローマ帝コンラデ三世と與に、第二十字軍を起す、功なし。

居士兵

醫院武士

第四節　是時、キリスト・イスラム兩教徒の中に、居士兵なるものの起る、キリスト教居士兵は、イェルサレム國の藩屛たり、其最舊きをヨハネ慈惠醫院の居士兵とす、之をヨハネ武士、又は醫院武士といふ、其制「醫院在住者は、僧又は居士にして、貧困・獨身・戒律・參詣者保護の四事を誓ひ、武裝せる居士は、參詣者を保護して不信者を退治し、僧は讀經其他の宗務を執り、普通の居士は、院内に在りて患者を看護す、イェルサレム亡びて、ロードス島に退く、後マルタ島に保ち、一八〇〇年終にイギリスに滅ぼさる。ヨハネ武士に續きて、フランス兵等ソロモン堂の傍に菴

御堂武士　ドイツ武士　ムラヒダ　サラヂン

し、居士兵を編む、故に御堂武士の名あり。一一九〇年ローマ帝又居士兵を募り、ドイツ武士をアッカに置く、後ベネチアに退く、一二二八年其一部北ドイツのウィスッラ河邊に移りて、土民を教化し、土地を拓殖す、バルト海の東北沿海地を墾きしは、ドイツ武士の力なり、今ドイツのプロシア、ロシアのクールランド・リォニア・エストランドの地是なり。又イスラム教居士兵は、ハッサンサバの刱むる所、ハシシム又ムラヒダと呼ぶ、其設立ヨハネ武士より二十餘年早し、シリア・ペルシアの山城に據り、恣に刺客を放ちて、王侯を刧す、其管長をシェイク ウル ヂェバルと稱す、山の長老の謂なり。

第五節　ヌール エッヂン既にシリアを定む、一一七一年ファチマ朝を滅ぼして、エジプトを取り、サラヂンを總督とす、サラヂン

エユブ朝　ベネチア　ラテン帝國

はクルドより出づ、剛明にして義勇を重んず、エジプトに自立し、一一八七年イェルサレムを降だす、之をエユブ朝の太祖とす、是よりエジプト歴代の君をマムルクスルタンといふ。明年ローマ帝フレデリキ一世、フランス王フィリポ アウグスト、イングランド王リチァード、第三十字軍を率ゐて、パレスチナに入る、功なし、一二〇二年フランス・イタリアの有志、ベネチアに集り、第四十字軍を起さんとす、十一世紀以來ベネチア漸く盛なり、製鹽・ガラス器を專賣し、銀行を刱め、アマルフィの後を襲ぎて、シリア・エジプトの貿易を壟斷し、其商船地中海を横行す。是時、エンリコ ダンドロ、ドージェたり、有志を說きてコンスタンチノプルを伐たしむ、フランドル侯バルドウィン總督となり、一二〇四年之を取り、ラテン帝國を建てて、帝位を踐み、四代に傳ふ、先帝國の宗室離散し

ギリシア帝國の復興

て、トラペズント・ニケーア・エピロスの三國を起し、尋にラテン帝國を侵す、ブルガル又寇す。一二六一年ニケーア帝パライオロゴス、ジェノバの入援に賴り、復ギリシア帝國を興す。一二二八年ローマ帝フレデリキ二世、第五十字軍を起し、イェルサレムに入り、親ら王冠を戴き、尊號にイェルサレム王を加ふ、一二四四年エジプト大擧して北侵し、パレスチナ・シリア・ダマスク皆陷る、一二四八年フランス王ルイス九世、第六十字軍を起して、エジプトを懲さんとす、功なし、一二七〇年第七十字軍を起し、チュニスのサラセン海賊を討つ、軍中疫癘起り、王死し、功なし、後二十餘年アッカ陷り、キリスト敎徒、最後の地を失ひ十字軍全く熄む。」

第六節　西ヨーロッパ諸國、大擧してイスラム敎徒を伐つ六度、東方に轉戰する百七十四年、鋒鏑に斃れ、饑渴に死するもの

十字軍の果實

二百萬、資財を糜する嘗るべからず、武門之が爲に貧しく、ベネチア・ジェノバの商賈之が爲に富みて、勢王侯を凌ぐ、小アジアの風車、西ヨーロッパに入りて、田園產を增したるも、ギリシアの綾・絹、エジプトの砂糖、西方の社會に傳はりて、奢侈漸く萠す、而してギリシア・アラビア文物の異彩は、麤野なる武人の眼に映らず、學林の寒僧舊に依りて學問の微光を保つ、獨都市漸く昌盛にして、僧官・列侯漸く暴威を振ふ能はざるに至るは、十字軍の果實なり。

第二十三章　イギリスとフランス

カペー朝

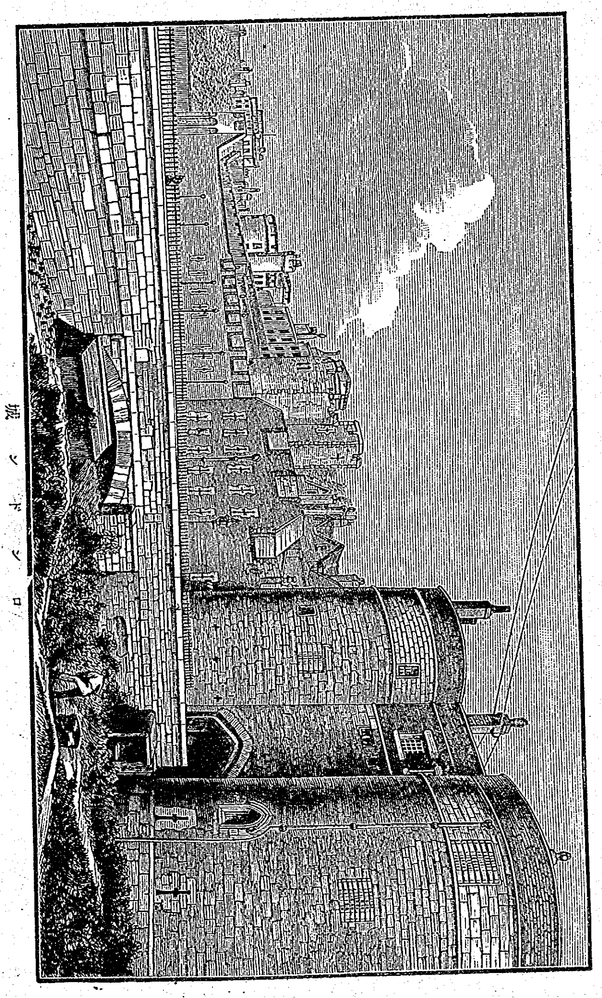
第一節　九八七年フランスのカロリンガ王統絕え、パリー伯フーゴー・カペー、列侯に推されて立つ、之をカペー朝の太祖とす、

列侯權を專にし、王は徒に虛器を擁す、ノルマンデー侯驕傲なり、イングランドに王となり、益王室を輕んず、三傳して一一五四年ウィルレム一世の外曾孫ヘンリ プランタジネット、アンジャーより入りて宗家を繼ぐ、之をプランタジネット朝の祖とす、死し、子リチャード立つ、第三十字軍にフランス王フィリポ アウグストを凌辱す、死し、弟ジョアン立つ、怯懦にして暴虐なり、姪アルツル、アンジャーを競望す、殺さる、フランス王乃ノルマンデー侯ジョアンを召して、其罪を治めんとす、イングランド王應ぜず、フランスの列侯、是に於て、ノルマンデー侯王命を蔑して入朝せず罪に依り國除すと宣告す、ノルマンデー復フランスに入る。

プランタヂネット朝

ノルマンデーを失ふ

第二節　ジョアン又法皇イノケント三世と爭ふ、法皇フランス王をしてイングランド・アイルランドを取らしむ、ジョアン大に怖れ、



ロンドン城

マグナカルタ

エドワルド三世

バロア朝

國を獻じ臣と稱し、歲貢を納れて法皇と和す、法皇乃フランス王に諭し、兵を解かしむ、會、ブラバント侯リエージュを掠む、フランス王、侯を討つ、ジョアン、ローマ帝オットー四世と相結びて侯を援く、一二一四年ブービーヌに戰ふ、敗績す、明年北イングランドの列侯・顯官の子孫等王の爲すなきを憤りて叛く、ロンドン都之に應ず、六月十五日王叛徒とランニミードに會し、悉く其强請する所を納れ、マグナカルタを裁可す、イギリス憲法の基礎玆に成る。

第三節　ジョアンの曾孫エドワルド二世、フランス王フィリポ四世の女を娶る、死し、子エドワルド三世立つ、一三一四年フィリポ四世死し、三子相續ぎて立つ、皆子なし、一三二八年姪バロア伯立つ、之をフィリポ六世となす、バロア朝の祖なり、イングラン

百年戰役

ド王フィリポ四世の外孫を以て、統を紹ぐ權ありとなし、フランスの王位を爭ふ、是よりイングランド、兵をフランスに動かすこと凡百年、之を百年戰役といふ、フィリポ六世死し、子ジョアン立つ、一三五六年ポアチエーに敗れて虜となり、終にロンドンに客死す、子カロロ五世立つ、將軍ヂャゲクレン善く戰ひ、漸く侵地を復す、イングランド僅にカレー・ボルドー・バイヨンヌの三地を保つ、是時、イングランド王エドワルド三世既に死し、長孫リチァード二世立つ、一三九九年國人之を廢し、叔父ジョアンの子ヘンリを迎立す、之をヘンリ四世とす、ランカスター朝の祖なり、一四一三年死し、子ヘンリ五世立つ。

ヂャゲクレン

ランカスター朝

ヘンリ五世

第四節　ヘンリ五世豪邁なり、曾祖父の志を紹ぎ、大擧してフランスを伐つ、一四一五年アゼンクールにフランス軍を破り、

後五年、パリーに入り、王妹を娶りて、フランスの攝政となる、ロアール河以北の地、悉くイングランドに歸す。一四二二年フランス王カロロ六世、イングランド王ヘンリ五世、倶に死す、カロロ六世の長子、乃カロロ七世と稱し、ヘンリ五世の弟ベッドフォード公、穉子ヘンリ六世を挾みて、フランスに號令す。バロア朝滅ぶるに垂んとす、會、一狂女あり、ジャンヌダルクといふ、神宣を受くと稱し、フランス軍を率ゐ、イングランド兵を却けて、カロロ七世をレンスに即位せしむ、イングランド內訌に窘み、復フランスに經營するに遑らず、僅にカレーを保つ、一五五八年亦之を失ふ。

ジャンヌダルク

第二十四章　議會の起　地方の連合

フランスの國會

第一節　十三世紀の初、フランスの列侯領に國會あり、議員は、

モンフォール

ロンドン議會

エドワルド一世

僧官・大地主の代表者、都市の代議士より成る、召集に依りて參列し、下情を上達して臨時の賦課に應ず、イングランド王ジョアン死し、子ヘンリ三世立つ、晩年財政紊れ、シチリアの王位を競望して巨債を負ふ、勢家重斂に堪へず、朋黨を結びて相軋る。一二六四年シモンド・モンフォール、列侯をオクスフォードに召集して王室黨に抗議し、王を虜にして、イングランドに號令す、幾許もなく、グロスター伯其黨を率ゐて去る。明年一月二十日モンフォール、フランスの先例に傚ひ、僧官百餘、伯五、男十七をロンドンに召集し、長吏をして各國より士各二人、數多の都市より市人各二人、五港より住人各四人を參列せしむ、之をイギリス議會の濫觴となす。一二七二年王死し、子エドワルド一世立つ、英明なり、一二八二年十一月二十四日、各國より士各四

ライン市聯邦

人、諸市より代議士各二人を召集し、政府の諮詢に答へしむ、是より代議士の召集漸く恒例となり、孫エドワルド三世の時、上下兩院成り、十五世紀の初に至り、議會國政を左右す。又ホンガリアに議會あり、其制イギリスと同じ。

第二節　一二五〇年ローマ帝フレデリキ二世死し、ドイツ大に亂る、孔道の列侯、縦に關税を課し、護衛料を貪り、商賈を俘にして償金を徴す、ライン河地方商業最昌なり、マース・シェルト兩河を下りて海外に通商す、故に列侯の濫妨亦最甚し。是に於て、一二五四年ライン河地方の諸市・列侯マインツに會合し、聯邦を成す、其目的は秩序安寧を保つにあり、加盟するものケルン以下六十餘市、列侯十餘、聯邦の疆域南チューリヒより北ミュンステルに至る、バワリア侯總裁たり、數年にして潰ゆ。一三三一

スワビア市聯邦　ハンザ同盟　デンマルク

年バワリア朝の帝ルイス、スワビアの二十二帝領市に諭して聯邦を成さしむ、幾許もなく亦散ず、獨ハンザ同盟北ドイツに起り大國家を成して範をオランダ・イギリスに垂る、ハンザ同盟は、十二世紀の初、バルト海南岸諸市の商賈ゴトランド島のウィスビーに輻輳し、商業組合を立てたるに起る十三四世紀の間、デンマルク强大にして、西南スウェーデン・エストランド・リウォニア・リューゲン・前ポメラニア・メクレンブルグを領し、バルト海を領海となす、リッベック敵地に介在し、スカニアのカド漁を禁ぜられ、孤立する能はず、一二四一年ハンブルグと相結び、後十年ハンザ同盟の盟主としてフランドル侯と盟約す。一三一九年ノルウェー王マグヌス・スウェーデンを并せ、ハンザ同盟を窘む、一三四〇年デンマルク王ワルデマル三世立ち、スウェーデンを爭ふ。一三四七年エスト

ハンザ同盟の疆域　スウィス

ランドをドイツ武士に賣り、後十四年ゴトランドを取り、ウィスビーを陷る、ハンザ同盟大擧して、ゴトランドを復し、ズンド海峽を扼す、一三六五年和成る、是時同盟の勢力範圍は、東スモレンスクより西ロンドンに至り、北ベルゲンより南エルフルトに達し、疆域を三區に分つ、ウェンド區中央にあり、北ドイツを管す、リッベック首都たり、リウォニア區東にあり、バルト海東方の沿海地を管す、ウィスビー首都たり、ウェストファリア區西にあり、ウェストファリア、オランダを管す、プロシア之に屬す、ケルン首都たり、同盟の都市九十餘、列侯又加盟するもの多し。

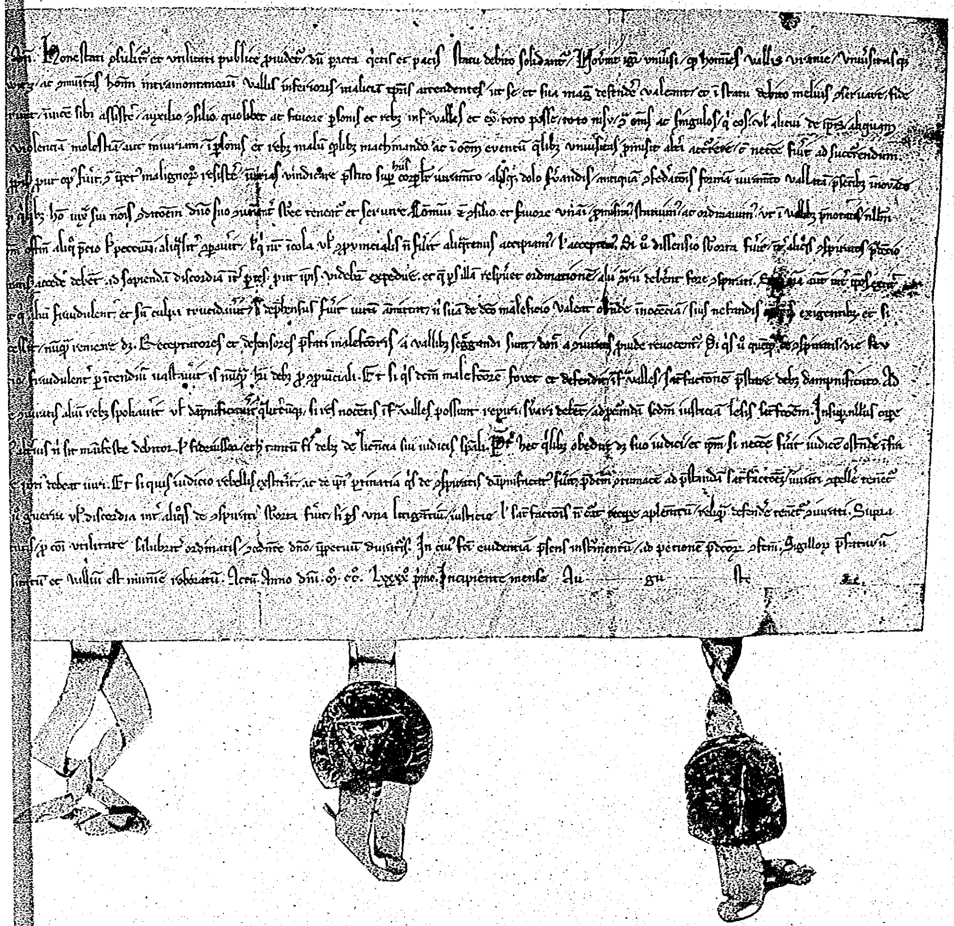
第三節　アルプ山サンゴタルド峠の北麓に、ウリ湖あり、湖畔の地をワルドステッテといひ、其住民を、ワルドロイテといふ、湖東にシュウィツ、湖西にウンテルワルデン、湖南にウリの三地方あり、シャ

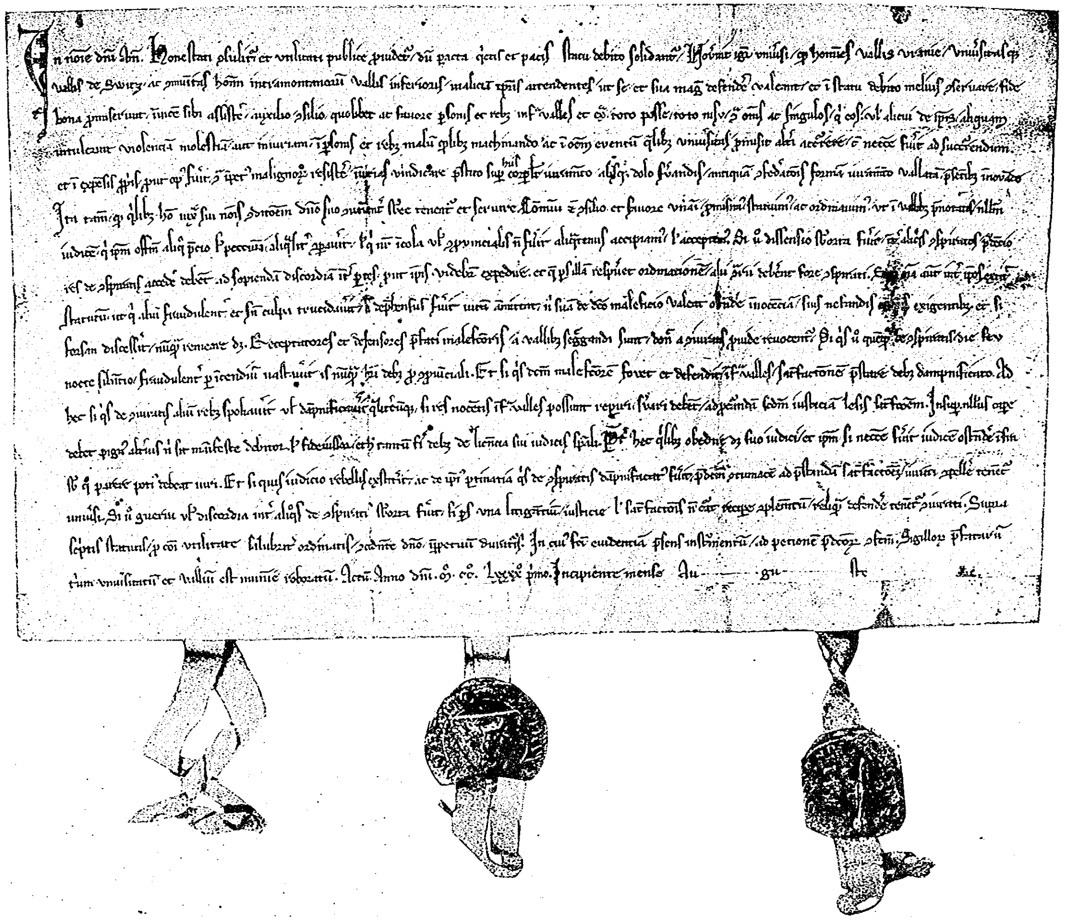
ハプスブルグ朝

ウィッは帝領にして艮民多く、ウンテルワルデン・ウリは諸寺之を分領し、賤民居住す、シャウィッ夙く東方高野のアインジーデルン寺領を蠶食す、寺僧屢〻之を訴ふ、シャウィッ悛めず。一二七三年ハプスブルグ伯ロドルフ、ローマ帝となる、之をハプスブルグ朝の太祖とす、雄才にして大略あり、一二七八年ボヘミア王オトカル二世をヂャルンクルートに破りてオーストリアを取り、六女を上バワリア・下バワリア・サクソニアの三侯ブランデンブルグ鎭守將軍、ボヘミア・ホンガリアの二王に配して勢威を固め列侯を威壓して、

オーストリア

帝領を家領とする策を建て、ワルドステッテの周邊を押領す、ワルドロイテ大に畏る。一二九一年七月十五日死す、壽七十四、オーストリア起る、長子アルベルト立つ、剛明なり、八月一日、三地方の豪族、密にシャウィッに會合し盟約を結ぶ、之をスウィス共和國


スウイス建國の盟約書



スウイス建國の盟約書

ハプスブルグ朝

オーストリア

寺領を蠶食す、寺僧屢之を訴ふ、シュヴィツ悛めず。一二七三年ハプスブルグ伯ロドルフ、ローマ帝となる、之をハプスブルグ朝の太祖とす、雄才にして大略あり、一二七八年ボヘミア王オトカル二世をデュルンクルートに破りてオーストリアを取り、六女を上バワリア・下バワリア・サクソニアの三侯、ブランデンブルグ鎭守將軍、ボヘミア・ホンガリアの二王に配して勢威を固め列侯を威壓して、帝領を家領とする策を建て、ワルドステッテの周邊を押領す、ワルドロイテ大に畏る。一二九一年七月十五日死す、壽七十四、オーストリア起る、長子アルベルト立つ、剛明なり、八月一日、三地方の豪族、密にシュヴィツに會合し盟約を結ぶ、之をスウィス共和國

テムチン　キフチァハ　オゴタイ

の濫觴とす、其シャウィッツ盟約に起るより、國號をシャウィッツ盟約國といひ、國民をアイドゲノスといふ、盟約者の義なり、今訛りて、スウィスとなす。

第二十五章 モンゴルの入寇 東ヨーロッパ諸國

第一節 十三世紀の初、モンゴル部の酋長テムチン、ダウリアの野に起り、衆に推されてチンギス、ハンと號す、元の太祖是なり。一二二二年太祖スブタイ・チェベ二將を遣して、南ロシアに遊牧するキプチャクを侵す、是より先き五十三年、太公ブセボロド三世、都をキエフよりブラヂミルに遷す、宗室乃キエフを領す、キエフ領主ムスチスラフ等、モンゴルの入寇を聞き、キプチャクと相合して之をカルカ川に擊つ、大に敗る。太祖死し、太宗オゴタイ立

バツ

つ、一二二九年復スブタイ等をしてキプチャク・ブルガル・サクシン等十一部を伐たしむ、一二三六年バツ・フユク・マング等宗室十一人に命じ、大擧して西侵す、バツ全軍を都督し、スブタイ參謀たり、明年ロシアに入る、リアザン・モスクバ・ブラヂミル・キエフ等二十餘市陷り、太公ユリ二世難に殉し、宗室多く之に死す。一二四〇年バツ西進してガリチアを取り、ポーランドを侵す、國人國都クラカウを棄てて、ドイツ・ホンガリア・モラウィアに遁る、明年ポーランドの宗室下シレシア侯ヘンリ、リーグニツの野にモンゴルを擊つ、全軍覆沒し、ヘンリ之に死す、ドイツ大に震ふ。是に於てバツ全軍を三隊に分ち、自本隊を將て、カルパチア山を度り、右翼隊を遣りてモラウィアを取らしむ、ボヘミア將ステルンベルヒ堅くオルミッツを守る、モンゴル取る能はず、退きて本隊と合

す、左翼隊は、プルート河を渡りて、ドナウ河北の地を清め、トランシルワニアを經て本隊と合せんとす。バツ、ホンガリアに入り、直に國都ペストを指す、王ベラ四世禦ぐ能はず、兵民奔竄して、ドナウ河以東の地モンゴルに沒す。會、太宗死し、バツ乃師を旋す。

キプチャク國
マング
フラグ

第二節　バツ、太祖の長孫を以て、既にキプチャク國を建て、ロシアを藩屬す、威名諸王に冠たり、一二五一年マングを擁立す之を憲宗となす。一二五三年弟フラグをしてペルシアに入り先づムラヒダを夷げ、次にハリファを降ださしむ。一二五六年フラグ進みてアム河を渡る、グルジヤ・ペルシアの王侯入りて謁し、ルーム・ファルスの使節又慶賀す、乃アラムート等五十餘城を屠る、ムラヒダ復遺孽なし、是に於て、ハリファモスタシムを召す

アッバス朝亡ぶ

モンゴル朝

バグダード市人フラグの使節を辱しむ、フラグ大に怒り、一二五八年バグダードを圍む十二日、城遂に陷る、ハリファ出降して殺され、市人屠らるるもの八十萬、アッバス朝三十七代にして亡ぶ、憲宗乃フラグをしてセルジック朝の故地を治めしむ、之をモンゴル朝の祖とす、國人國君を稱して、イルカンと云ふ、イルカンはトルコ古言、君の義なり、一二六五年死し、六傳して一二九五年曾孫ガザン立つ、賢明なり。宰輔ラシッドをしてモンゴル國史を編ましむ、一三〇四年死し、モンゴル朝漸く衰ふ。

第三節　一二五六年バッ死し、四傳して一二六五年孫マングチムル立つ、ギリシア帝パライオロゴス、マングチムル族ヌガイと善からざるに乘じ、女をヌガイに配して好を結び、以てモンゴルの南下に備ふ、而もルームの小弱を侮り、東境の防備を

エルトグルル

オスマンリ

セルビア

怠る、是時ホラズムの遺民チッルクメン部より出でたるもの四百戸、ルームに仕へ、ザカリア河畔に遊牧す、エルトグルル之に長たり。一二八八年死し、子オスマン嗣ぐ、パライオロゴス・モンゴル二朝倶に振はざるを觀、一二九九年以來屢ニコメヂアに寇し、遊牧の俗を棄てて村市に定居す、一三二六年死す、子オルハン嗣ぐ、剛明なり、ブルサに都し、イェニチェリ兵を編みて、ビチニアを併す、尊號を立てず、唯エミルと稱す、國民亦名なし、國人自稱してオスマンリといふ、トルコ帝國茲に起る。一三六〇年死し、子ムラッド一世立つ、器略あり、ロマーニアを取りて、アドリアノプルに西都を奠き、屢ドナウ河・アドリア海の間に起れるセルビアを征す。是時パライオロゴス五世の孫ヨハネ、ギリシア帝たり、ムラッドの姻戚なり、エミルに追從して甚謹む、是を以て、エミル又

バヂァシッド

ヂッテー
ヂァガタイ

敢てコンスタンチノプルを侵さず。一三八九年コソボポリエに鏖戰してセルビアを滅ぼし、刺客に殺さる、ギリシア帝國苟安を樂む、子バヂァシッド立つ、雄才にして大略あり、ドナウ河南のスラブ諸部を平げ、河北の地を降だし、ギリシアを定め、小アジアを取る、乃スルタンの尊號を用ひ、コンスタンチノプルに逼る。

第四節　元の太祖の子チァガタイ葱嶺兩麓の地を領す、八傳して一三〇六年五世の孫ヅア死し、東西二部に分る、東部をヂッテー、西部をヂァガタイといふ。キプチァク國は、一三五六年第十代バツ六世の孫ヂァニベク死して復振はず、諸王の裔孫諸地に散居す、十四世紀の半ヂッテー最强し、ヂァガタイは夙に宰輔權を專にす、ヅアの五子相續ぎ立ちて後、諸姪交〻入りて繼ぎ諸宰互に權を爭ふ、ヂッテー主ツクルクチムル之に乘じて、ヂァガ

チムル

タイを伐ち、一三六二年子エリアスホヂァを納る、國人不平なり、宰輔フサイン兵を擧ぐ、後チムル之に代りて、エリアスホヂァを逐ひ、一三七〇年ヂァガタイの實權を握る、是に於て大に四方を征し、兵を動かすこと三十五年、中アジア・ペルシア・南ロシア・北インド・小アジア・シリアを取り、ヂッチの裔トクタミシをキプチァクに納れ、バヂァシッドを虜にして、小アジアを返す、一四〇五年明を征せんとして途に死す、壽七十、遺命して領土を諸子孫に分つ、帝國瓦解す。諸孫ウルフベク星學に精しく學術を獎む、名最顯る、其裔孫バベル、インドに入り、モンゴル朝を剏む、チムルの祖はモンゴル部より出で、ヂァガタイの宰輔たり、世世職を襲ぎ君家の族たり。チムル英明にして寛仁なり、チァガタイ朝の祀を存し、帝號を稱へず、制度を新にし、戰術を革め、軍紀を

肅し、軍實を充たし、自記錄を著す、シェリフ エヂン遺稿を得て、チウル實錄を撰む、ザフェル ナーメ是なり、

第五節　一四〇三年バヂァシッド客死し、四子互に闘ふこと二十年、一四二一年ムハメッド一世復一統す。是年死し、子ムラッド二世立つ、明年兵二十萬を擧げてコンスタンチノプルを圍む、取る能はず、ギリシア帝歳幣を入れ、都城以外の地を割きて和す、一四四八年ギリシア帝コンスタンチヌス、スルタンの允許を經て、スパルタに立つ、パライオロゴス八世の孫なり。一四五一年ムラッド二世死し、子ムハメッド二世立つ、剛愎にして美術を好む、必コンスタンチノプルを取らんと欲す、明年要塞をボスポロス海峽の西岸に築き、ムハメッド一世置く所の東岸の要塞と相待ちて海峽を制せんとす、ギリシア帝之を爭ふ聽かず、一四五

東ローマ滅ぶ

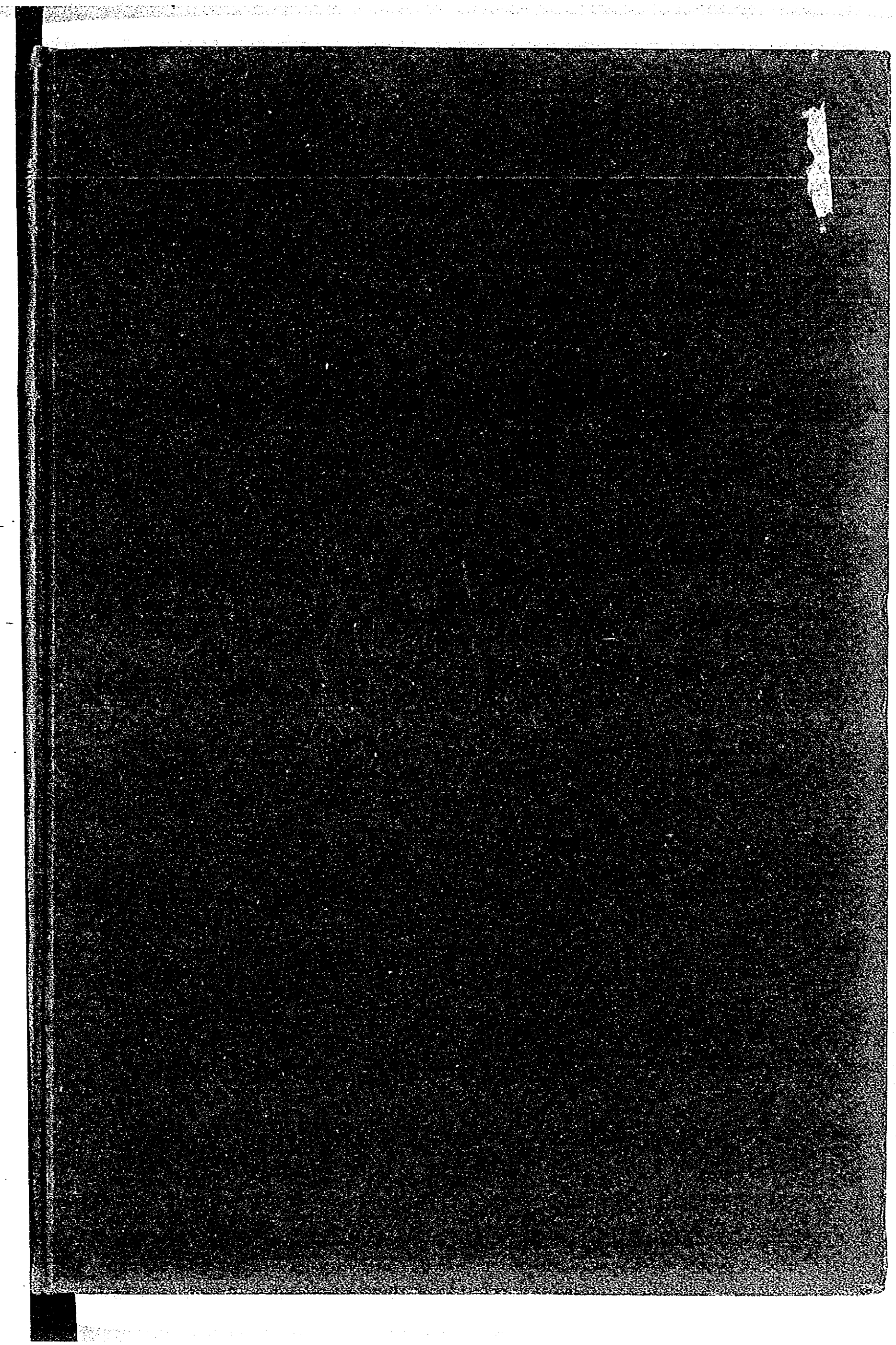
三年四月コンスタンチノプルを圍む、攻圍する五十三日、遂に陷る、帝コンスタンチヌス之に殉す、スルタン乃都をコンスタンチノプルに遷す、東ローマ終に滅ぶ。

K220,25
5
226-46

中學 西洋歴史教科書 卷上終

明治三十六年二月十二日印刷
明治三十六年二月十五日發行

中學西洋歴史教科書卷上
定價金九拾五錢

著作權所有

著作者 東京市本郷區向岡彌生町三番地 坪井九馬
印刷者兼發行者 東京市日本橋區本町四丁目十六番地 小林義
發兌 東京市日本橋區本町四丁目十六番地 文學社